

陶器南遺跡発掘調査概要・IX

2004年3月

大阪府教育委員会

はじめに

陶器南遺跡は、堺市の東南部に広がる泉北丘陵の北端に位置する遺跡です。遺跡の周辺では、都市化が進む大阪府下にあってもまだ田園地帯が広がり、起伏に富んだ古くからの地形が良く残されています。泉北丘陵は、古墳時代から古代にかけての日本最大の須恵器の大窯業生産地であった陶邑窯跡群があることでよく知られています。この地の「陶器」という地名が語るように、周辺には須恵器窯跡、陶器千塚古墳群が分布し、さらに延喜式内社「陶荒田神社」が遺跡の南側に鎮座することから、陶邑窯跡群と密接な関係をもった遺跡であると考えられています。

大阪府教育委員会では、府営集落基盤整備事業「陶器北地区」の実施に伴う陶器南遺跡の発掘調査を平成5年度から継続的に実施しています。これまでの調査では、古墳時代後期を中心とする須恵器生産に関連したと思われる人々の集落跡をはじめ、中世の大型建物跡などの遺構、遺物も多数検出しており、陶邑以降の様子も徐々に明らかになっています。

今年度の調査では、「陶器川地区」において、旧陶器川および合流する河川跡や、その河川内から須恵器が一括して出土したことから、河川を利用して須恵器を搬送していた状況をうかがうことができました。また、「老ノ池地区」「住区地区」では、古墳時代後期を中心とする遺構、遺物のほか、中世・近世の遺構、遺物も検出したことから、陶邑における窯業生産が終焉したあとの土地開発の状況をうかがえる貴重な資料を得ることができました。

今回の調査に際して、ご協力いただきました地元の方々をはじめ、関係各位、諸機関に厚く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に変わらぬご理解とご協力をお願いいたします。

平成16年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 向井 正博

例　　言

1. 本書は府営集落基盤整備事業「陶器北地区」予定地内で実施された陶器南遺跡他の発掘調査概要報告書である。調査は大阪府環境農林水産部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
2. 現地調査は文化財保護課調査第2グループ技師、西川寿勝・杉本清美を担当者として、陶器川地区（陶器南遺跡）を平成14年6月～10月に、住区地区（陶器遺跡・陶器千塚の確認調査）を平成14年8月～9月に、老ノ池地区（陶邑窯跡群）を平成14年10月～平成15年3月に、それぞれ実施した。遺物整理は調査管理グループ技師、林　日佐子・小浜　成を担当者として実施し、平成16年3月末に終了した。
3. 本書の執筆・編集は西川・杉本が行い、一部は渡辺晴香（本府調査員）による。
4. 本調査の航空写真測量は陶器川地区（陶器南遺跡）を（株）ウエスコに、老ノ池地区（陶邑窯跡群）を（株）アコードにそれぞれ委託して実施した。なお、撮影フィルムは上記の受託会社において保管している。また、遺物写真は有限会社阿南写真工房に委託して撮影した。
5. 本文・挿図に用いた標高は東京湾標準潮位（T.P.値）を示す。また、座標値は国土座標第VI系（世界測地系）によるもので、方位は座標北を指す。
6. 発掘調査・遺物整理及び本書の作成に要した経費は農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。報告書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は1,659円である。

目 次

はじめに 例言 目次

第Ⅰ章 調査計画	1. 調査位置と調査方法(西川・杉本)	1
	2. 陶邑窯操業以前の陶器南遺跡(西川)	6
	3. 中・近世の陶器南遺跡(西川)	7
第Ⅱ章 発掘調査	1. 老ノ池地区(陶邑窯跡群)の調査(西川・渡辺)	10
	a. 現地調査		
	b. 老ノ池地区発見遺物		
	2. 住区地区(陶器遺跡・陶器千塚)の試掘調査(西川・渡辺)	16
	a. 現地調査		
	b. 住区地区発見遺物		
	3. 陶器川地区(陶器南遺跡)の調査(杉本・渡辺)	24
	a. 現地調査		
	b. 陶器川地区発見遺物		
第Ⅲ章 まとめ(西川・杉本・渡辺)	55	

挿 図 ・ 表 目 次

図 1	周辺遺跡分布図	2
図 2	今回調査区位置図	3
図 3	新座標による地区割	4
図 4	旧座標による地区割	5
図 5	老ノ池地区調査地位置図及び土層柱状図	11
図 6	老ノ池地区発見須恵器	12
図 7	老ノ池地区試掘区発見須恵器大甕	13
図 8	老ノ池地区発見中世遺物	14
図 9	老ノ池地区発見古瀬戸灰釉大目鏡	15
図10	住区地区試掘地点位置図	17
図11	住区地区試掘調査、平面及び土層断面図(1)	19
図12	住区地区試掘調査、平面及び土層断面図(2)	20
図13	住区地区発見のサヌカイト製火打石	20
図14	住区地区発見遺物(1)	22
図15	住区地区発見遺物(2)	23

図16	陶器川地区調査地位置図	24
図17	陶器川地区調査区位置図及び上層柱状図	25
図18	陶器川地区1～2区遺構平面図	27～28
図19	陶器川地区3区遺構平面図	29～30
図20	陶器川地区1～3区遺構断面図	31
図21	陶器川地区柱列1・2平面及びピット断面図	33
図22	陶器川地区河川147出土遺物平面及び土層断面図	34
図23	陶器川地区4区遺構平面及び遺構断面図	36
図24	陶器川地区発見の石器	38
図25	陶器川地区発見古墳時代の須恵器	40
図26	陶器川地区河川147一括出土須恵器（1）	41
図27	陶器川地区河川147一括出土須恵器（2）	42
図28	陶器川地区河川147一括出土須恵器（3）	43
図29	陶器川地区河川147一括出土須恵器（4）	44
図30	陶器川地区河川147一括出土須恵器（5）	45
図31	陶器川地区河川147一括出土須恵器（6）	46
図32	陶器川地区河川147一括出土須恵器（7）	47
図33	陶器川地区河川147一括出土須恵器（8）	48
図34	陶器川地区発見の飛鳥時代須恵器	50
図35	陶器川地区発見の奈良時代須恵器	51
図36	陶器川地区発見の平安時代須恵器	51
図37	陶器川地区発見の古墳時代土師器	51
図38	陶器川地区発見の中・近世遺物	53
図39	陶器川地区発見の須恵質紡錘車	54
図40	陶器川地区発見の銭貨	54
表1	住区地区試掘区遺構・遺物一覧表	18
表2	出土遺物対照表（1）～（3）	59～61

図版目次

図版表紙 陶器川地区河川147一括出土土器

図版1	老ノ池地区の調査区	図版5～6	陶器川地区的調査区（1）（2）
図版2	老ノ池地区発見遺物	図版7～12	陶器川地区発見須恵器（1）～（6）
図版3	住区地区的試掘調査区	図版13	陶器川地区発見遺物
図版4	住区地区発見遺物		

第Ⅰ章 調査計画

1. 調査位置と調査方法

陶器南遺跡は堺市陶器北・辻之に所在する。これまで遺跡内では継続して実施されているは場及び集落基盤整備事業に伴って、広範囲に発掘調査がなされてきた。調査面積を累計すると約28000m²に及ぶ。

今回の調査は遺跡内でもっとも北西の低所に位置する陶器川による開削谷中の2240m²（陶器川地区）と、その南東斜面445m²（老ノ池地区）、陶器川地区の北側段丘上112m²（住区地区）について実施した（図2）。老ノ池地区は陶器南遺跡の遺跡範囲外になるが、陶器南遺跡の南半分で重複する陶邑窯跡群に含まれる。行政区画の上では陶邑窯跡群にあらるもの、遺跡の性格としてはこれまで確認されている一連の陶器南遺跡集落にかかわるものと共通する。同様に、住区地区も陶器遺跡・陶器千塚に及ぶが陶器南遺跡と共通する性格と考える。

ちなみに、陶器南遺跡は平成5年度からほ場整備事業に伴って継続的に試掘調査、発掘調査を行ってきた。もともと、遺跡としては知られていなかった。遺跡範囲は本來銅鐸発見伝承地点とされていた部分を拡張して、新たな遺跡と位置づけてしまったものである。調査が進むに従い、集落の規模が拡大し、陶邑窯跡群や陶器千塚との重複がみられる。今回の調査でさらに陶器川地区も遺跡範囲に加わり、陶器南遺跡は東西1km、南北0.7kmに及ぶ（図1）。

本来、陶器南遺跡集落の生産域が陶邑窯跡群であり、墓域が陶器千塚であるからやむを得ないことだろう。しかし、調査地点は広域に及ぶものの、須恵器つくりに携わった人々の集落の実態はほとんど判明しておらず、広範囲に須恵器片の散布がみられるにもかかわらず、発見された須恵器窯跡も少ない。遺構は段丘上、段丘斜面から渓谷内に及ぶことが判明した。発見される遺物は古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にまで及ぶ。今後は遺構・遺物の性格を整理する必要があると考える。遺跡範囲拡大の詳細については本府教育委員会刊行『陶器南遺跡発掘調査概要』II 1996を参照されたい。

さて、大阪府教育委員会、（財）大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行1/10000地形図を基準として4段階の区分を実施している（図3・4）。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をA～O、横軸を0～8に区画する。陶器南遺跡はE5区内にある。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500m、横2000mの範囲である。陶器南遺跡は7・10・11区内にある。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1～20、横軸をA～Oに区分したものである。

今回調査地は、陶器川地区が2L～7Lに、老ノ池地区が14O・15O・13Bに、住区地区が1H・20H・19H・20Iなどにあたる。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をa～j、横軸を1～10に区分したものである。例えば、今回調査区の一つはE5-10-4L-14jなどと表記される。



図1 周辺遺跡分布図

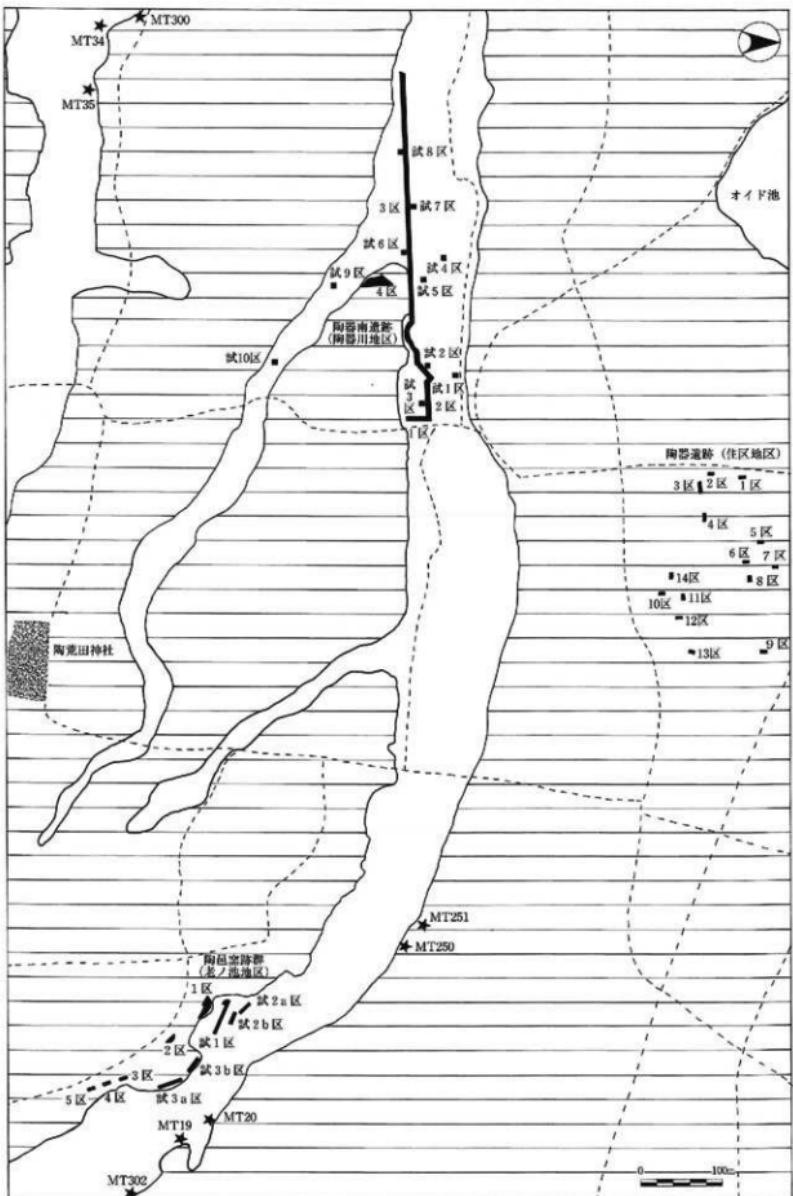


図2 今回調査区位置図

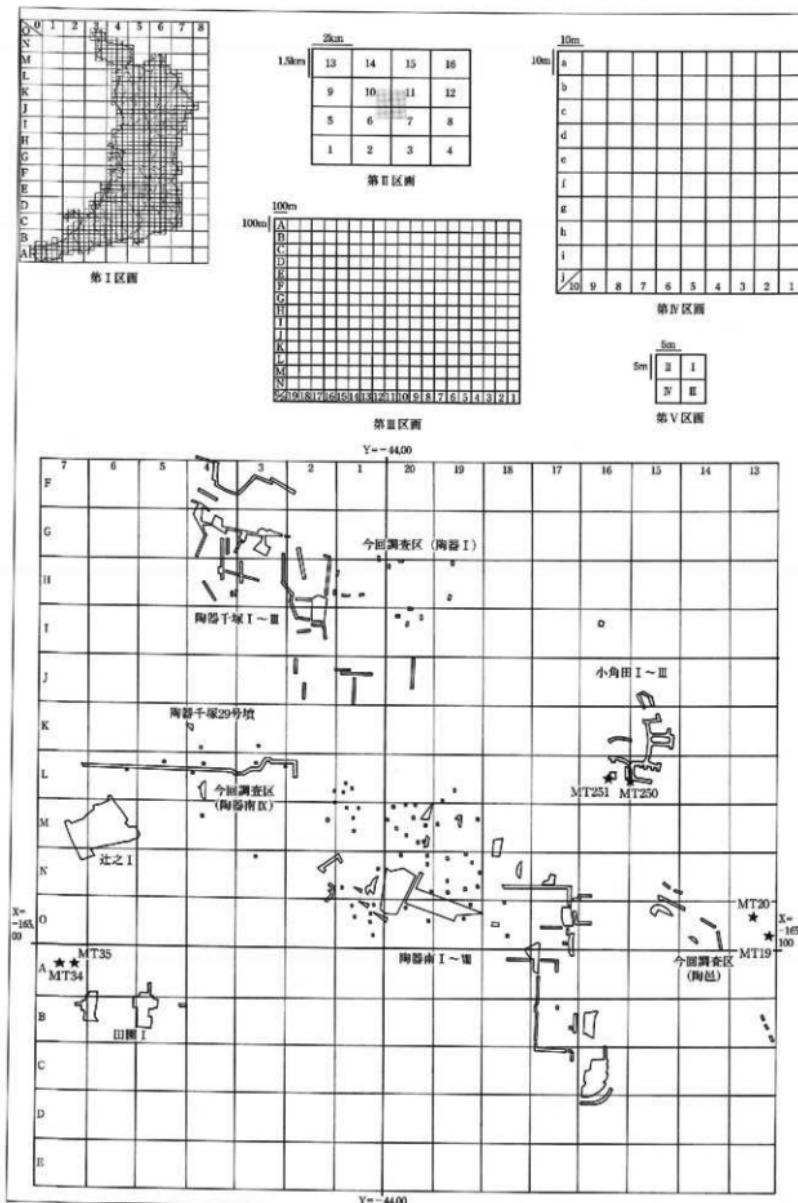


図3 新座標による地区割

特記すべきこととして、2003年度から座標値が国際基準に基づく新座標に変更されたことである。これまでの調査で示されている座標値は南に約730m、東に約550mずれる。これにともなって座標値から導かれた地区割の表記も変更となっている。これまでの調査の地区割りは旧座標に基づくもので、混乱を避けるため新・旧座標値と地区割基準を併記して掲載する（図3・4）。

これまでの調査では表土（水田耕作土）と遺物包含層（水田床土）に覆われた地山上に遺構が切り込まれた形で発見されている。よって、本調査は表土を機械掘削で除去し、遺物包含層を人

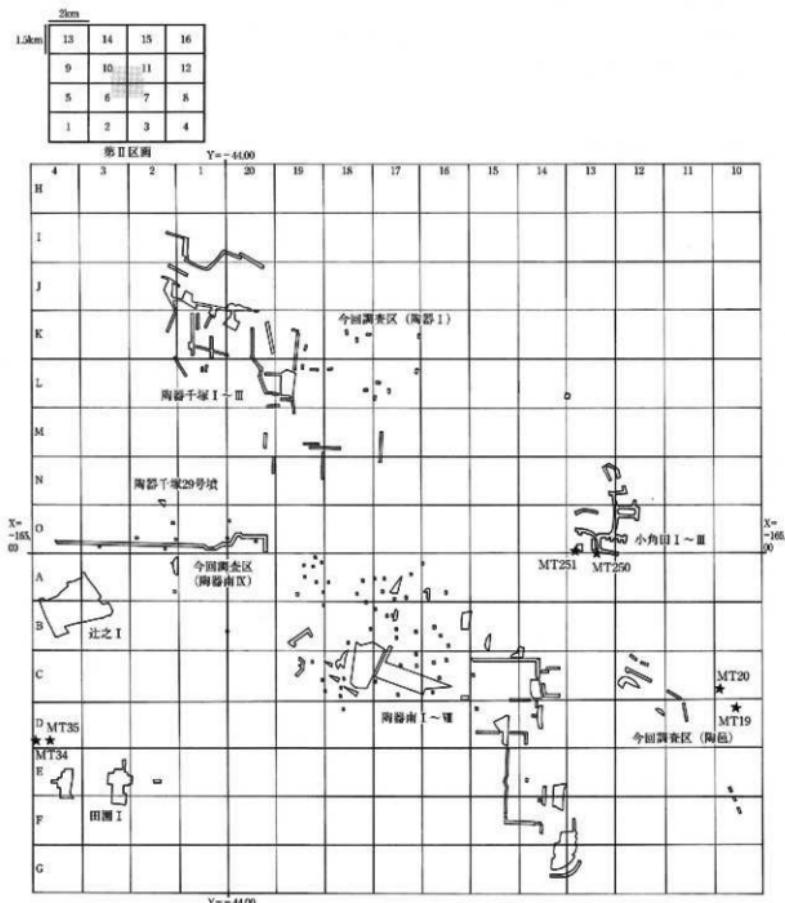


図4 旧座標による地区割

力掘削して遺構の検出に努めることとした。ただし、部分的に表土下に近年の整地土層が確認される場合があり、この部分については遺物の有無を確かめながら機械掘削した。また、陶器川地区については陶器川の旧流路の堆積物が厚く覆っている地点があり、堆積物を機械掘削で除去した部分もある。

検出された遺構は航空測量によって1/20及び1/50で迅速に図化を行った。これまでの調査標定点と合わせ3級基準点を設置し、そこから調査区周縁に4級基準点を設けて地区割をすることとした。遺構、遺物が多数検出された場合は基準点から遺物とりあげグリッドを細かく設定したが、遺構の密度が低く、遺物も遊離、散在していた老ノ池地区と、住区地区の試掘調査については今回設定しなかった。老ノ池地区・住区地区の調査では、遺物を地区ごとにとりあげることとした（第Ⅱ章1・2節に詳述）。

2. 陶邑窯操業以前の陶器南遺跡

前節に示したとおり、陶器南遺跡の認識は本来伝陶器村出土銅鐸発見推定地に端を発する。しかし、古墳時代後期以前の土地開発の実態はほとんどわかつておらず、断片的に残された遺物から類推する他ない。

古い遺物では、遺跡の南端で後期旧石器のナイフ形石器が採集されている他、縄文時代後期の特徴を示す石鏃や石匙などがいくつか発見されている（図24・P.38）。今回の調査でも凹基式石鏃と時期不明の剥片が発見されている。これらの遺物は泉北丘陵の各地の調査で偶然に確認される状況と共通することから、広域に活動していた狩猟・採集民の存在を示すものだろう。

弥生時代以降の土地開発は遺構に残されていないものの、遺跡中央の段丘状で二点の石庵丁が発見されており、谷水田などの開発がこの時期にさかのほりそうである。また、伝陶器村出土の弥生時代微製鏡と銅鐸は出土地を確認できないものの、集落が存在した可能性を示す重要な示唆となる。古墳時代前・中期の状況も明快ではないが、古墳時代微製鏡がいくつか伝わっており、引き続きこの地を拠点とした集団が存在した可能性を示す。以上については、『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅱ・Ⅲ 1996・2001に詳述している。

古墳時代後期になって、泉北丘陵一帯に須恵器窯群の造営がはじまり、陶器川上流を中心に、陶器南遺跡周辺にも須恵器窯がつくられ、それに伴って集落が発展していったことはこれまでの調査で自明のこととなった。ただし、陶邑窯跡群のはじまりを示す初期須恵器を焼いていた窯や須恵器は見つかっておらず、周辺の開発は国産須恵器の定型化段階以降ととらえることができる。そして、もっとも発展する段階は6世紀後半の群集墳が流行する時期で、遺跡のほぼ全域で該当期の須恵器片が採集されている。また、陶器千塚の造営も行われる。

これまでの調査によって、6世紀後半に栄えた陶器川南の段丘上の集落は、一部が飛鳥時代に南端に移動、奈良時代になって再び一部が中央に移動することが解明してきた。しかし、奈良時代中期から平安時代にかけての集落域は確認されておらず、集落の終息か移動は判然としてい

ない。

注目すべきこととして、古墳時代後期から飛鳥・奈良時代まで、陶器南遺跡の集落が須恵器窯の移動に伴って中心をかえながらも継続して営まれ、画期を見いだせないことである。それは窯業生産と物流システムが古墳時代後期の中央集権機構から奈良時代の律令国家機構に移行しても、改変されることなく継続的であったことを意味するものである。言い替えれば、陶邑窯跡群と陶器南遺跡集落が飛鳥京・藤原京・平城京など、国家機構に結びつく窯業生産の一翼を担っていたとすれば、それ以前の古墳時代後期にさかのぼっても国家と強く結びついた管理機構、運搬経路で窯業生産をしていたと考えることができる。

このような状況で須恵器工人の特質を色濃く残す陶器千塚のカマド塚など、有力者が台頭して一部の者が古墳を造営し続けたことは、一見、国家機構への反目とも受け止められる。しかし、古墳時代後期を通じて渡来人を含む手工業生産者の身分再編と登用、庇護が進行し、国家機構の揺らぎの中に勢力を伸ばす機会が与えられた実態が示されていると理解できるのではないだろうか。

3. 中・近世の陶器南遺跡

泉北丘陵に発展した須恵器窯群は平安時代前期には終焉する。鎌倉時代になって、新たな水田開発と集落の形成がこれまでの調査で確認されている。ただし、その詳細は不明瞭で資料は限られる。平安時代中期には陶器寄人が須恵器生産に引き継いで水田請負人として再編された記録が残り、陶器南遺跡の中世集落はその末裔のものと考えられる。今日の陶荒田神社もこのような人々によって発展、整備されていったのではないだろうか。

南北朝期には陶器南遺跡付近に陶器城が営まれ、陶器南の集落も集団化が進んでいたと考えられる。しかし、南朝方の楠正儀を中心にして淡輪助重や和田助氏らによって攻撃を受けている(1351年)。室町時代にも、泉州方面の統治は混迷し、さらに地元民の自治意識も高まって、堺の発展や根来衆・一向衆の台頭などをみることができる。室町時代前期以降の陶器南遺跡は顕著な遺構・遺物が発見されておらず、不明な部分が多い。史料では和泉国坂本に本拠を置く和泉国人の支配下だったことが知られる。

自治都市堺が隆盛し、信長の勢力が伸張し始めた16世紀後半、泉州地域では根来衆との衝突が、摂津の大坂では石山本願寺を中心とする一向衆との衝突が長期間続けれられる。岸和田城を拠点にした信長勢は根来寺を攻撃、泉州と紀州北部の平定をほぼ完了する。

信長の意向を受け継いだ秀吉は、岸和田城に中村一氏、さらに小出秀政を城主にすえ、泉州の守りを固める。そして、秀吉自身が大坂城を拠点に全国平定に乗り出したため、近接する泉州の防衛は恩顧の家臣に託されたのである。小出秀政は秀吉の母、大政所の妹を正妻とする家臣で大坂城の造営に伴って、岸和田城も本格的な近世城郭として改築する。

そして、このころ、陶器地域を含む一万石が小出氏の所領として安堵されている。小出秀政は

秀吉の跡を継いだ秀頼の時期にも活躍し、茨木城主の片桐且元と共に豊臣氏の蔵入地を総監する立場になっている。それは秀頼を補佐する家康など、五奉行の算用を監査する立場でもあり、実質上の郡代の役割を担っていたのである。

小出秀政は陶器南に屋敷を造営し、四男三尹に治めさせた。現在、具体的な場所はわからない。江戸時代に引き継がれた陶器藩は三尹以降、三代続いたが小出重興には子がなく、元禄九年（1696）に三十四歳で没した。陶器藩は弟の重昌を養子にして継がせようとしたが、幕府の許しが出ない間に重昌も亡くなってしまったので、封地没収となった。しばらく後の宝永二年（1705）に小出陶器藩は再興され、幕末まで受けられるのだが、五千石の旗本として、陶器地域一帯のみの所領へと格下になったのである。

今回、住区地域の試掘調査で小出秀政の頃の遺構・遺物が確認されるにいたり、陶器藩形成期の生活痕跡が埋没していることが明らかとなった（P.14）。また、老ノ池地区の調査でも水田畔に含まれる陶磁器に17世紀初頭のものがいくつかみられることから、陶器藩の展開とともに水田開発が進められたことも確認できる（P.10）。あるいは、小出秀政の死亡（1604）をきっかけに江戸幕府は和泉国の検地を小出配下に実施させており、この機に水田の整理が行われたのかもしれない。

ちなみに、現在知られる陶器藩陣屋跡はもともとの屋敷地が文政四年（1821）に焼失したため、この地の1472坪を買い上げて造営したものである。それは四周を土塁で囲み、南と西に堀をめぐらせるものである。土塁の南に門、北に裏門と西には足軽出張所と門が設けられていた。内部は本家の他、小崎沢右衛門など四名の藩士足軽屋敷が造営されていた。屋敷の周囲、上之・辻之・田園地域に合計204畝23歩の家中屋敷があったことがわかつており、焼失によって陣屋がうつされたとしてもさほど遠くない場所からの移動と考えられる。

もう少し詳しく見てみると、陶器地域の新田開発に精を出した小出三尹の息子有重は開発を大坂天満の福嶋屋次郎兵衛に請け負わせた。福嶋屋は現在の土木会社のような組織をもち、資金と人夫を抱えて開発事業に乗り出し、約800石の農地を確保する。大半は大豆畑だったと推定するが、これを耕作するために村を整備する。それが福田村である。現在の陶器地区的北東に位置する地域である。そして、陶器藩は福嶋屋と年貢を折半し、代々保証するという好条件の証文を残した。つまり、福田村は藩と商人からの二重支配を受ける格好だった。福田村は幕府の知らない地図にのらない村なのである。幕藩体制に認められないこのような支配構図は時代がくだるにつれ、表面化することとなり、先に示した藩の断絶もこのような背景が影響していると推定されるのである。

ところで、小出三尹は小出秀政が女中おかいとの間にもうけられた子供で、岸和田城を引き継いだ吉政や吉英とは系譜が違った。そして、おかいは某氏と婚姻し、おねねを生む。おねねは先に登場する福嶋屋次郎兵衛の妻としてむかえられていることも関連が読み取れる。

さて、近年まで、陶器南遺跡周辺では田園風景が広がり、米作が盛んであることが知られる。

これまでの調査も水田耕作のためのほ場整備事業に伴うものである。小出陶器藩が断絶するおりにも、幕府の調べで陶器地域は上田で小物なりも良いことが記されている。ただし、遺跡を形成する丘陵の頂部は水路を整備することが難しく、実際のところ水田耕作だけが行われていたのか疑わしい。また、その他の商品作物にどのようなものがあり、それがいつ頃までさかのぼるかも解明されていない。史料を頼りにすると18世紀後半から19世紀前半にいたり、陶器地域を含め、広く揖河泉地域で菜種油をめぐる紛争が起きていることが知られる。

陶器地域10カ村で菜種の生産農家が陶器藩に何度も嘆願をしている。かいつまめば、在郷の紋り油屋が油の取り引き価格を一方的に設定し、談合しているから、売買を自由化してほしい、あるいは領内の紋り油屋や仲買・問屋を限定しないではほしい、ということである。農民は菜種から収益で肥料や元種を確保しているという。この嘆願は陶器藩をこえ、広域に及ぶ国訴にまで発展していることから、菜種が片手間の商品作物だったとは考えにくい。現在のところ、菜種油の普及がいつまでさかのぼるのか知れないが、陶器地域は近隣に堺環濠都市があり、灯明皿などが普遍的に発見されていることより、室町時代後期以降には需要があったと考えられる。

同様に、商品作物としてのサツマイモについても天満の青物市場への独占出荷が一方的な価格設定をまねき、大鳳郡や丹北郡の村落が協議して、盛んに訴訟がくり返された。天保期から安政期にかけてのことである。安政期に大坂町奉行所に出された訴訟では、天満青物市場が堺の青物市場や卸売業をすっかり吸収したことによって他売が禁じられ、卸し価格を不当に引き下げたことが原因という。訴訟の結果、青物市場には奉行所の出張所が設けられ、イモはそれまでより三割も高く売れ、運賃も不要になったため、農民の訴えは満足されたという。不況とあいつぐ飢餓に備え、幕府は商品価格と生産量に過敏となっていたことがうかがい知れる。

このような商品作物の栽培や新田開発などによって、陶器地域にも豪農へ成長するものがあった。例えば、陶器北の児玉与三兵衛、田園の定右衛門、福田の新兵衛は借財に苦しむ旗本の水野氏が新田に課せられる御用金を勝手に押取しようとしたことに猛烈な抗議をしている。抗議によれば、過分の「御願金」を出資させられ、水野の返済が滞っているにもかかわらず、次々に上納を求められている実態が暴露されている。このような紛争は近隣の豪農と武家との間でも繰り広げられ、江戸幕藩体制と武家の権威を揺るがす構造となった。

第Ⅱ章 発掘調査

1. 老ノ池地区（陶器窯跡群）の調査

a. 現地調査（図5 図版1）

調査区は陶器南遺跡の南東に接し、陶器川を北に眺める段丘斜面に位置する。陶器川によって形成された開析谷の北側段丘上には小角田遺跡と窯跡群（MT250・251）、調査区からの下流約1500mの北側段丘上に陶器千塚が広がる。上流部の北側斜面には陶器山19・20号窯（MT19・20）、中池1～3号窯（MT302～304）、阿弥陀池1～5号窯（MT305～308）がある。窯跡に伴う遺物として古墳時代後期・飛鳥時代の須恵器が採集されている。調査区は以前に行った試掘調査、試1区（長さ40m、幅1.5m）・試2a区（長さ20m、幅1.5m）・試2b区（長さ10m、幅1.5m）・試3a区（長さ30m、幅1.5m）・試3b区（長さ24m、幅1.5m）の段丘上部に位置し、5か所に及ぶ（図5）。下流側の1区ともっとも上流の5区とでは比高差が約10mある。

1区は開析谷南斜面を中腹に位置する三日月形の373m²で、表層（水田耕作土）を除去すると約0.3mの遺物包含層（水田床土）が堆積しており、古墳時代後期と中世の遺物が含まれていた。堆積状況から南上方より流出した土が起源と考える。表土下には部分的に上方の地山を客土した整地土層もみられた。整地の時期はわからないが、中世以降の水田開発によって、地形が大きく改変されている可能性が高い。表土下約0.5mのところで地山の黄褐色粘土に達した。地山は南から北に緩やかな傾斜が認められる。

1区の遺物包含層からはコンテナ5箱分の古墳時代後期と中世の遺物が発見されたものの、該当期の造構はなかった。北西隅で水田の区画を示す段差と溝を確認した。調査区北側は水田畦畔が盛り土されており、畦畔造営時に含まれる遺物に17世紀前半の陶磁器が含まれることから、現在の形に水田が形成された時期がうかがえる。17世紀前半は調査区の北に陶器薄陣屋が形成され、新たな年貢徵収体制になった時であり、前章に示した水田開発の記録と対応でき注目される。

2区は陶器川南岸開析谷の斜面中央、試3a・3b区の南方に位置する32m²である。表土直下に約0.4mの遺物包含層があり、古墳時代後期の須恵器が少景みつかった。しかし、造構は残されておらず、水田化に伴って削平された可能性がたかい。

3・4・5区は老ノ池の南岸斜面のテラス部に位置し、老ノ池をはさんで陶器山19・20号窯（MT19・20）を望む。陶器山20号窯は現在老ノ池の堤になっており、窯の様子を確認することができないものの、陶器山19号窯は崩落した窯体部が老ノ池北岸に露出している。

各調査区は2m×7.5mで、表土を除去すると地山粘土層が露出し、遺物包含層はなかった。造構も残されておらず、造構面ごと流出、あるいは整地されたと考える。ただし、調査地周辺には須恵器、土師器が散布し、上方段丘上に中世集落が存在したのだろう。陶器山19・20号窯（MT19・20）と試掘調査成果は本府教育委員会刊行『陶器南遺跡発掘調査概要』II・VIII 1996・2000に詳しい。

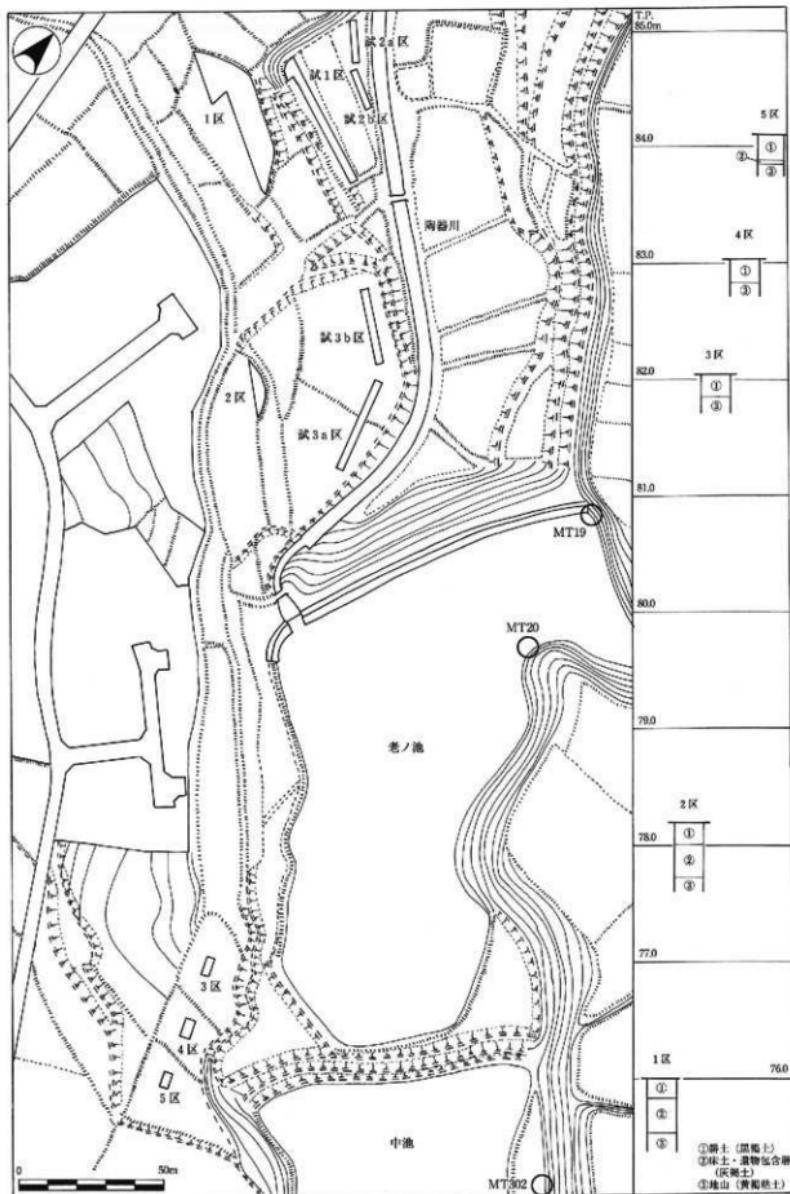


図5 老ノ池地区調査地位置図及び土層柱状図

b. 老ノ池地区発見遺物

①古墳時代～奈良時代の遺物（図6・7 図版2）

発見された遺物は須恵器、土師器である。大半は須恵器で、土師器は図示できるものは殆どない。6世紀代のものが中心で、5世紀のものはない。7世紀末～8世紀代のものが少量見られる。

須恵器壺蓋は、かえりがないもの（1・2・5～7）とあるもの（3・4・8）に分けられる。大半はかえりがない。これらには口縁端部に段をもつもの（5・6）があり、外面に沈線をもつもの（5・7）もある。概して、端部のつくりはあまく、6世紀前半の特徴を示す。かえりが明瞭なものはつまみを有するもの（4）以外は壺身との区別が明瞭でない。

壺身は口縁部に立ち上がりのあるもの（9・10・13・14）、ないもの（11・12）、高台をもつもの（15・16・23）がある。立ち上がりのあるものは大型で、内傾がきつく、底部は平らである。6世紀前半の特徴を示す。

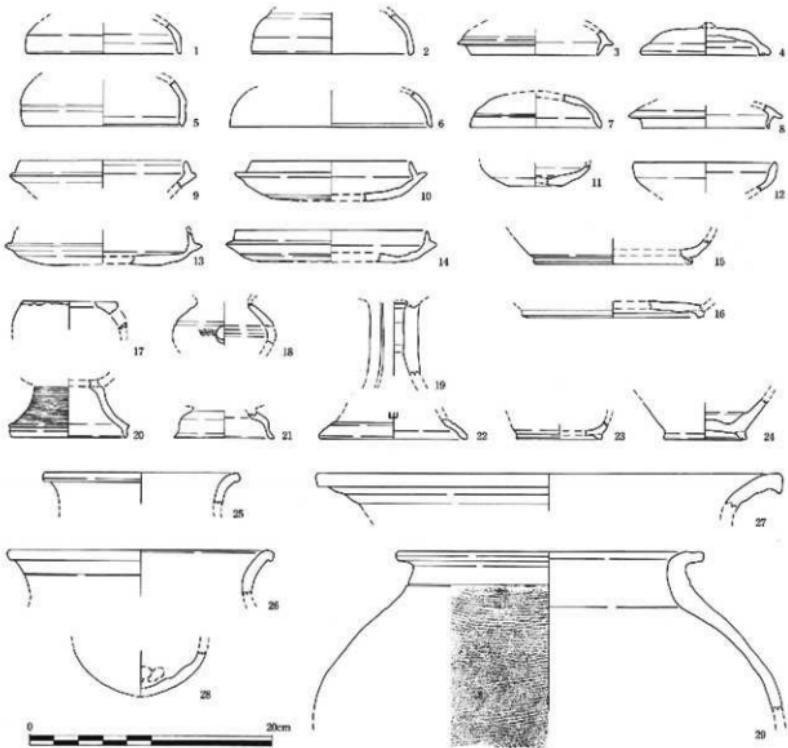


図6 老ノ池地区発見須恵器

焼台（17）は、天井部径 8 cm、天井部と体部に円形の穴が設けられている。これまでの調査でいくつか出土が認められる（『陶器南遺跡発掘調査概要』Ⅱ・Ⅲ 1996・1997）。

竈（18）は、外面体部に連続した刺突紋が施され、その上に自然釉が厚くかかる。

高坏は脚部に透かしをもつもの（19・20・22）ともたないもの（21）がある。（20）は脚部外面に条線が施され、脚端部はやや丸みをおびる。

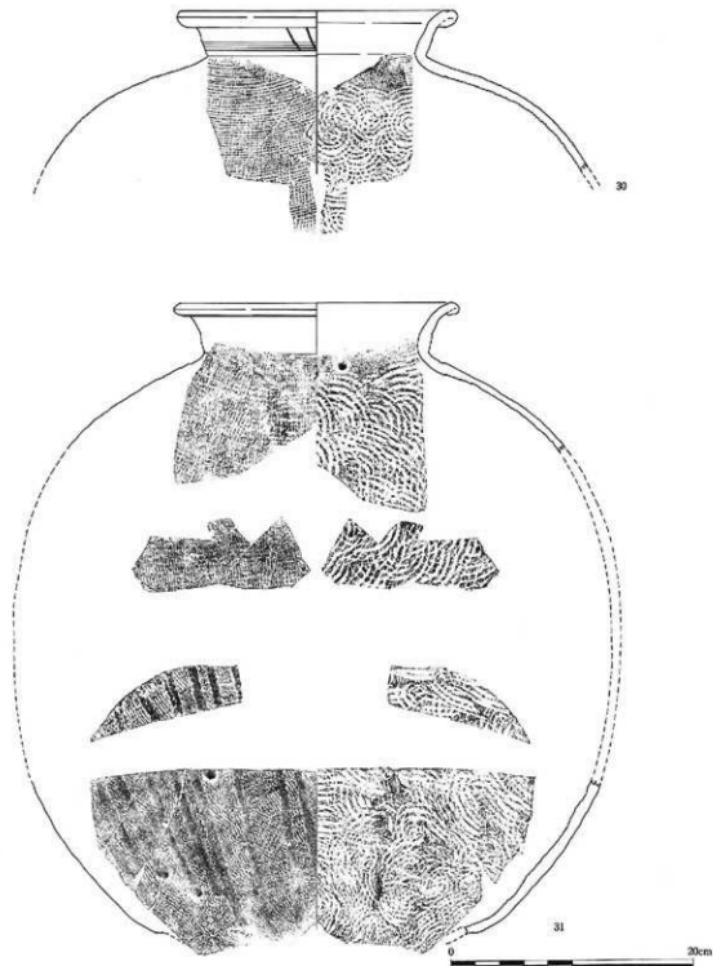


図7 老ノ池地区試掘区発見須恵器大壺

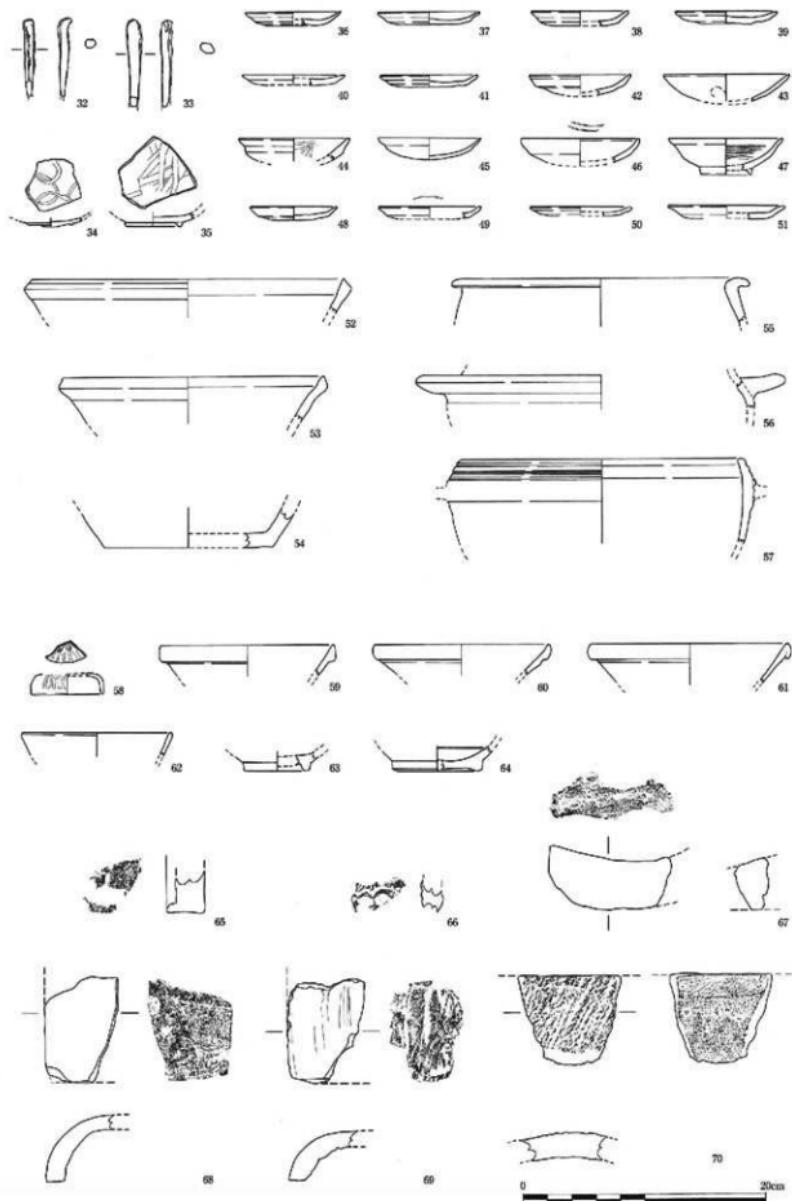


図8 老ノ池地区発見中世遺物

(24・25・28) は壺で、(25) は口縁部を強く屈曲させ、口径16cmを測る。(24) は7～8世紀のものである。(28) は壺の底部で、底部中央に指頭圧痕が残る。

甕(26・27・30・31)は、それぞれ口縁部の形態が異なり、口縁部をゆるやかに外反させ、端部を下方向に屈曲させたもの(26)、口縁部は外反、屈曲させた端部が三角形を呈するもの(27)、口縁部を外反させ、端部が玉縁状のもの(30・31)がある。甕(30・31)は外面を格子目タキの後にカキ目調整し、内面は同心円紋が残る。この2点の甕は試1区から発見されたもので、河川堆積物中に、完形に近い状況で埋没していた。陶器川での運搬中に転落したものだろうか。

②中世の遺物(図8・9 図版2)

土師器皿・瓦器椀・皿・東播系すり鉢、中国製白磁・青白磁・青磁、瓦、鉄製品などがある。

鉄製品(32)は残存長6.4cm、最大幅0.9cmで、詳細な時期は不明である。(33)は残存長7.1cm、最大幅1.3cmを測る。いずれも釘だろう。

土師器皿(36～43)は、器高より3型式に大別できる。最も多く発見されたものは、器高が0.7cm～1.2cm程度のもの(36～41)、次にやや深手で器高1.0cm、口径8.2cmのもの(42)、器高1.3cm、口径10.4cmを測り、やや器高が高く、椀状に体部が丸みを帯びるものがある(43)。調整は基本的に同じで、口縁部に近い外面は指頭圧痕をナデ消し、底部は未調整である。

瓦器椀(34・35)は、比較的高台がしっかりするもの(35)と、形骸化したもの(34)がある。多くは形骸化した高台になる。瓦器皿(44～51)には、内面に暗紋が明瞭に残るもの(44・46・49)と簡略化されたものがある。また、高台をもち、口縁端部を外反させるものもある(47)。

土師質羽釜(55～57)は、口縁端部をての字状に折り曲げたもの(55)と、口縁部が内傾し、外面に条線が施されたもの(57)がある。額下径は(56)が25.2cm、(57)が26.2cmを測る。

東播系すり鉢(52～54)の口縁端部は、すべて上方へ引き上げられ、三角形を呈する。

中国製の製品はすべて小破片で、白磁の製品が多く、玉縁状の口縁をもつIV類(59～61・64)・II類(63)であった。青磁は同安窯系の碗(62)がみつかっている。12世紀前半のものである。

青白磁合子(58)の外面は外型により蓮弁の紋様がある。景德鎮窯の可能性がある。口縁端部は丁寧に釉薬を削る。口径5.8cm、器高1.7cm、厚さ0.3cmを測る。

軒丸瓦(65)は瓦当厚3.1cm、(66)は1.8cmを測る。いずれも複弁蓮弁紋の小片で、(65)は低い外縁がある。軒平瓦(67)の瓦当部は欠損しており、凹面には布目痕がみられる。額の厚さは4.2cmを測る。丸瓦は、四面に布目痕があり(68・69)、コビキB痕が見られる。(69)は、凸面を横方向に粗くなれる。

(68)は厚さ1.5cm、(69)は1.2cmを測る。

平瓦は凹面に布目痕、凸面に繩タキ痕が見られる。(70)は厚さ2.0cmを測る。

古瀬戸灰釉天目碗(71)は口径14.0cmを測る。

15世紀代のものか。



図9 老ノ池地区発見古瀬戸灰釉天目碗

2. 住区地区（陶器遺跡・陶器千塚）の試掘調査

a. 現地調査（図10～12 表1 図版3）

堺市陶器北地内の府営集落基盤整備事業「住区地区」ほかに先立って、遺構、遺物の有無とその深度を確認する目的で試掘調査を実施した。試掘場所は休耕田や荒れ地になっている部分に、 $2 \times 4\text{ m}$ の試掘坑を14ヶ所設置して実施した（試3区のみ $2 \times 8\text{ m}$ ）。

調査対象地は西半分が陶器千塚、東半分が陶器遺跡に含まれる。これまでの調査では南にひろがる陶器南遺跡が継続的に調査されており、5世紀後半から8世紀にかけての集落が発見され、集落の続きが発見される可能性がある。南東の小角出遺跡では6世紀の集落と5世紀後半の須恵器窯跡がみつかっている。その一方、西に接する地域は戦前まで100基近くの古墳群が存在していたが、耕地化や宅地造成などによって大半の古墳が消滅し、いくつかの古墳が発掘調査されている。6世紀後半の副葬品などが知られる他、内部主体が須恵器工人の影響を強く受けたカマド塚と呼ばれる構造をもつものなどが発見されている。

また、調査地の東側に接して、陶器藩陣屋跡が遺存する。陶器藩は秀吉恩顧の家臣、小出秀政の三男、三尹に拝領されたものだったが江戸時代になって家系は有重、重興の三代で断絶した。十年後の宝永二年（1705）、有重の弟、尹仍が5000石の旗本として藩を継ぎ、この地に陣屋を再興して以後、八代続いて明治に至っている。調査対象地は陶器藩陣屋跡を東に望む、ひらけた地形であるため、かつては藩の家臣団の居住区などが存在した可能性もある。

各試掘区ごとに概要を報告する。

試1区・試2区は調査対象地の西端に位置し、91年度の試掘区19トレンチ（91-試19区）に近接する。19トレンチでは6世紀後半の古墳主体部残欠が確認されており、その周溝が予想されたが、遺構は確認することができなかった。包含層中から試1区と試2区で計27片の須恵器片が発見された。

試3区は調査対象地の西南端に位置する。当初、 $2 \times 4\text{ m}$ の試掘区を設定、調査区中央で南北溝3-1を確認、溝の幅などを確定するため、西に $2 \times 4\text{ m}$ 分拡張した。その結果、南北溝は幅3.5m、深さ約0.4mあることがわかり、更に調査区の西端で埋め土のよく似た並行する南北溝の東肩を確認した。南北溝やその上面からは古墳時代後期の20片以上の須恵器片が発見された。いずれも破片となっており、この溝に伴うものかどうかはわからない。

試4区は試3区の東、同一水田面に設定した。真南約10mに本瓦葺きの民家の母屋がある。調査の結果、四つの土坑を確認した。土坑4-1からは17世紀初頭頃の漆焼大甕、信楽焼すり鉢などがまとまって発見された。他の土坑にも同一個体の土器片が含まれており、遺構群は同じ時期と考える。陶器藩に関連する集落があったのだろう。

試5区・試7区は調査対象地の北の中央に位置する。地山面が削平されており、遺構はなく、遺物もほとんど確認されなかった。

試6区・試8区は試5区・試7区の東、ひな壇に造成された水田の高所に位置する。試6区で

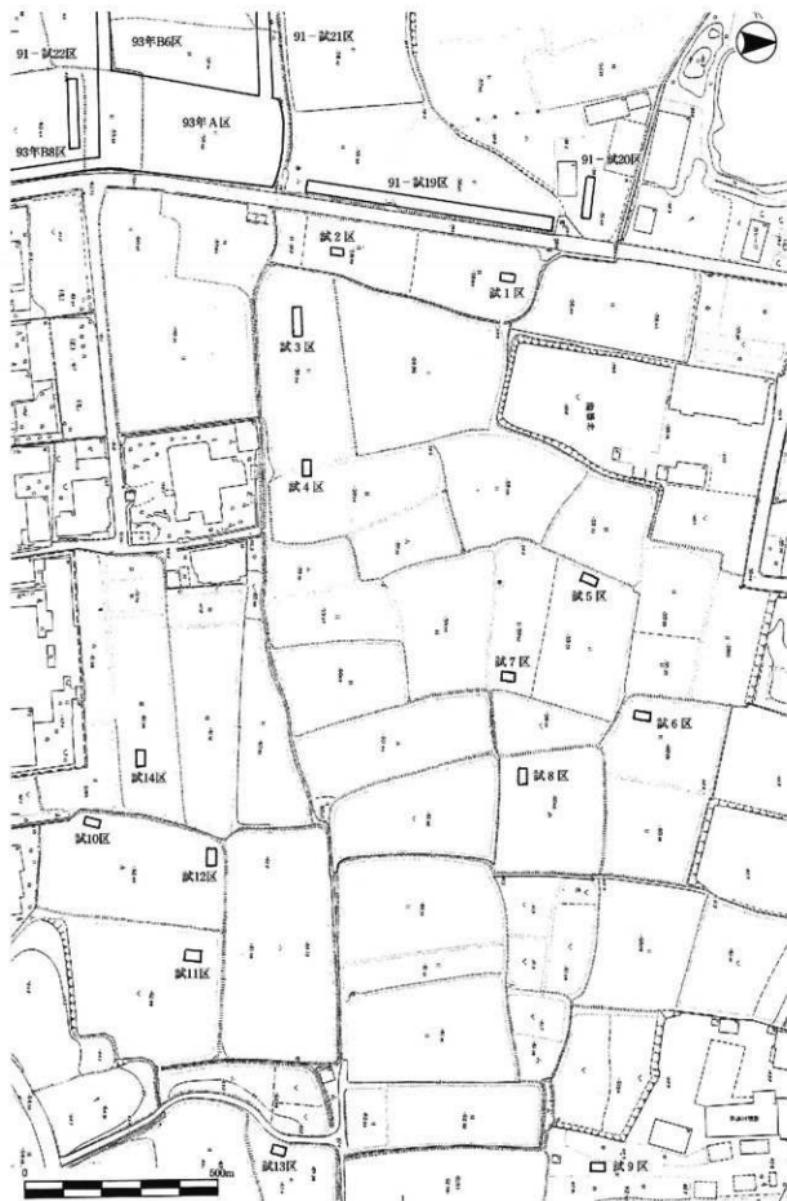


図10 住区地区試据地点位置図

は幅0.3m程の浅い東西溝6-1が発見された。試8区では遺構が確認されなかつたものの、6世紀後半と8世紀の須恵器片、合わせて約190片が確認されており、付近に遺構が存在すると考えられる。

試9区は調査対象地の東北隅に位置する。地山面が削平されており、遺構・遺物は発見されなかつた。

試10区・試11区・試12区・試14区は調査対象地南の中央部で、ひな壇造成された水田群に対し一段ずつ試掘区を設定した。試12区で幅約0.5mの浅い東西溝12-1を確認した他、遺構は見つからなかつた。各試掘区から古墳時代後期の須恵器片が多数発見された。

試13区は調査対象地の南東端のもっとも高い水田面に設定した。3か所で不定形な土坑を確認した。植栽などの攪乱かもしれない。同時にいくつかの須恵器片が発見された。

その他、調査対象地の休耕田などで土器片の表面分布を観察した。概して、調査対象地内ではいたるところで須恵器が採集でき、その量はコンテナ1箱に及んだ。特に、東側のひな壇造成された水田斜面に多く露出しており、地山が浅いところでは古墳時代後期の包含層が風雨で洗い出されているようだ。

各試掘区の遺構・遺物と表面採集された遺物の分布を鑑みると、調査対象地では古墳時代後期・奈良時代・中世末～近世の遺構がひろく複合している可能性が高い。今回の試掘調査は面積が小さく、遺構が確認できなかつたところもある。しかし、遺物包含層のひろがりと地表面に散乱する遺物の広がりからみて、付近に古墳・住居跡などの遺構があると思われる。したがって、対象地域の開発においては事前に本調査が必要と考える。ただし、近年の水田造成で部分的に遺構面が削平されているところもある。今回の調査では削平された範囲を限定することはできなかつた。

トレンチ番号	試1区	試2区	試3区	試4区	試5区	試6区	試7区	試8区	試9区	試10区	試11区	試12区	試13区	試14区
遺構の有無・種類	—	—	溝	土坑	—	溝	—	—	—	—	—	溝	土坑	—
包含層の深度(cm)	25	25	25	10	—	15	12	40	—	50	70	40	25	20
遺物の有無・数	21	6	27	610	4	7	19	191	4	34	63	20	4	5
時期			古墳?	近世初頭		古墳?		古墳?				古墳?	古墳?	

表1 住区地区試掘区遺構・遺物一覧表

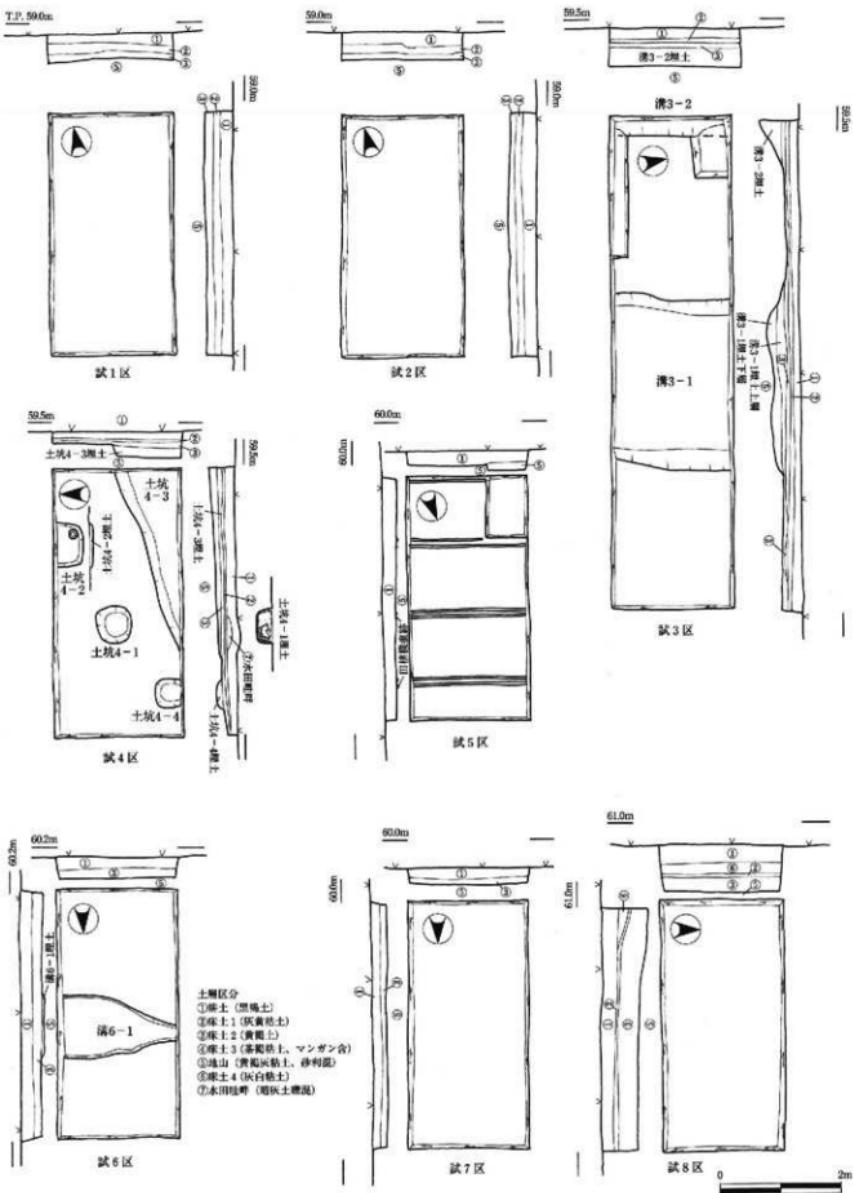


図11 住区地区試掘調査、平面及び土層断面図（1）

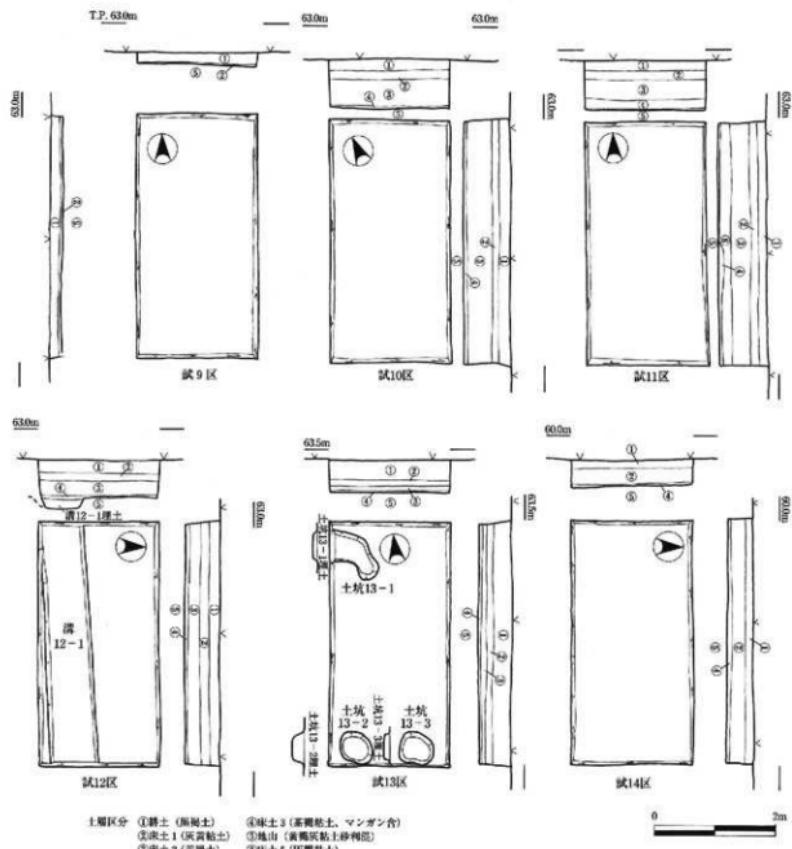


図12 住区地区試掘調査、平面及び土層断面図（2）

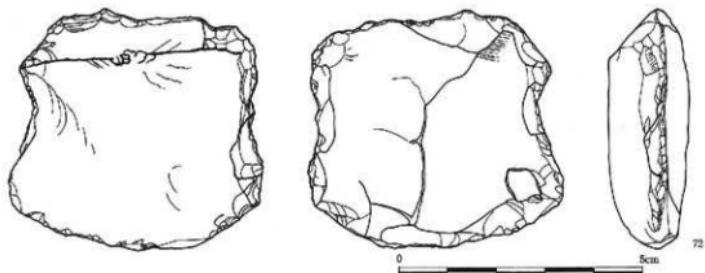


図13 住区地区発見のサヌカイト製火打石

b. 住区地区発見遺物

①古墳時代～奈良時代の遺物（図14 図版4）

古墳時代の遺物は須恵器、土師器である。

須恵器壺蓋は口縁端部が丸く、天井部を丸く仕上げ、稜が明瞭でない（74～76）。その中でかえりのあるものとないもの（74～76）がある。（74・76）は口縁端部に段があり、外面体部に沈線が施される。（73）は壺の蓋である。

壺身は口縁端部が低く内傾する（78・79）、もしくは内傾しながら先端をやや外反させる（77・80）ものがある。

無蓋高壺（86）は体部外面を突帯で区画して刺突紋を施す。短脚の高壺（87・88）は屈曲した短い脚部をもつ。長脚の高壺（89～92）は二段透かしをもつ。ともに脚端部は丸く仕上げ、6世紀後半頃のものである。

甕（94～96）は突帯に区画された中に刺突紋が施される。体部は小さく厚い。

こね鉢（93）の口縁端部は平たく、内側に傾斜し、口縁部外面は強く横ナデする。

壺（81）は口縁部を外反させ、端部は丸くおさめる。口径14.0cmを測る。

甕（82～85）は口縁部を外反させ、丸くおさめるもの（82）と、玉縁状にするもの（83・84）がある。大型の甕（83・84）の頸部にはヘラで数条の縱線を入れる。（85）は内面体部に青海波タキ痕、外面体部にはカキ目が施される。（82～84）の口径は約20cmを測る。

その他、奈良時代の須恵器小片なども採集している。図示できたものはない。

②中～近世の遺物（図13～15 図版4）

中国製青磁碗（97）は龍泉窯の製品で、高台内に鉄釉が塗られ、内面見込みには印刻が施される。

試4区土坑4-1から一括で瓦質土器、土師質土器などが出土した（98・103～106）。室町時代末から江戸時代初頭の時期になる。小出陶器藩の入植期のものと考える。いずれも済焼製品と考える。

瓦質土器は羽釜・すり鉢がある。羽釜は口縁部が直立するタイプ（99）と内傾するタイプ（100）がある。頸下径は（99）が26.2cm、（100）が28.4cmを測る。

すり鉢（101・102）は口縁端部を上方に引き上げ、端部外面を横方向にならぶ。内面には櫛状の工具で底部から口縁部にむかってすり目を入れる。

土師質土器はすり鉢・甕・甕蓋・焜炉などがある。採煙土器（98）は口径18.3cmを測る。内面はハケ調整、口縁部は横ナデ、外面体部はナデ調整が施され内面全体に、煤が厚く付着する。胎土は済焼製品（101～103）と酷似する。

すり鉢（103）は外面のナデ調整が粗く、粘土紐の痕跡が強く残る。内面は外面と比べ丁寧にハケ調整が施され、すり目は12本単位で入れられる。底径13.0cmを測る。

甕（106）は口縁部が台形を呈し、口径約66cmを測る大型である。内面はハケ調整を施してお

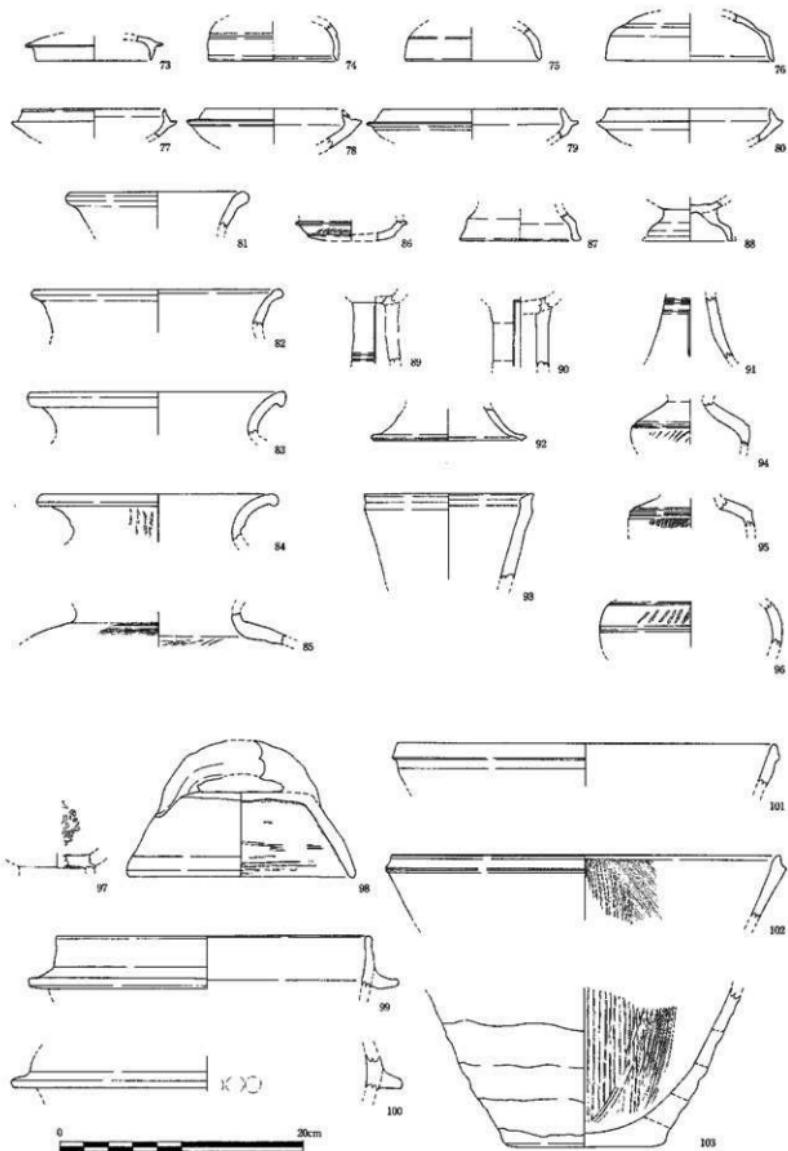


図14 住区地区発見遺物（1）

り、外面の調整は磨耗のため不明瞭である。他に、玉縁口縁をもつ甕の小片もみつかっている。

甕蓋（105）は口径32.6cm、器高4.6cmを測る。内外面共にナデ調整、口縁部は横方向に丸くな

で仕上げする。蓋と考えるが、外面に煤が付着し、鍋・焰烙などに転用していた可能性がある。

焜炉（104）は器高25.1cmを測る。脚は貼りつけで、体部外面は粗い斜め方向のケズリ、底部際

は横方向のケズリを施す。内面に煤が付着する。

その他、試4区付近からサヌカイト製の火打石（72）が採集された。長辺5.2cm、短辺4.9cmを測

る。短辺中央にくびれがあり、四方を打ち抜いて使用している。

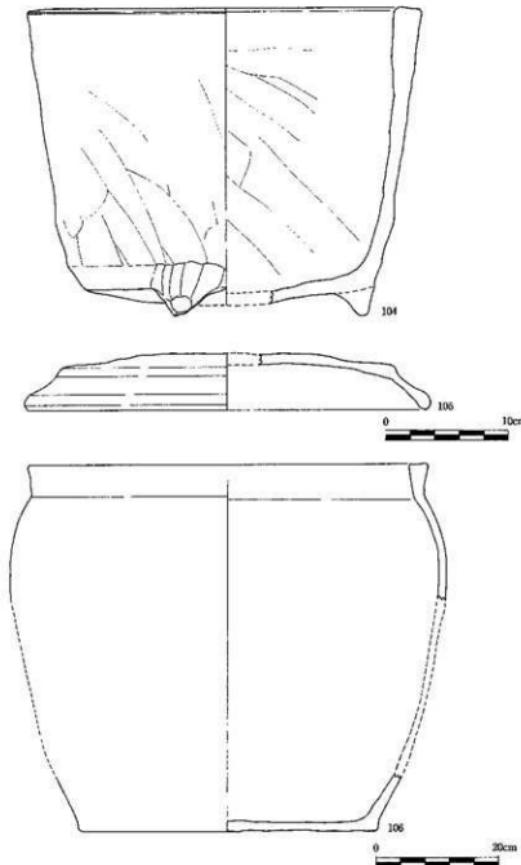


図15 住区地区発見遺物（2）

3. 陶器川地区（陶器南遺跡）の調査

a. 現地調査（図16～23・図版5・6）

陶器南遺跡は泉北丘陵の北端に広がる遺跡で、古代における須恵器的一大生産地である陶邑窯跡群に近接し、その北側の段丘上には陶器千塚、南側には辻之遺跡が存在する（図1）。今回の調査区は、陶器南遺跡の西端部に位置し、北側を画する陶器川と南側の谷から流れ込む小河川が合流する地域にあたる（図16）。平成13年度に実施された試掘調査によって確認され、遺跡範囲が西側に拡張された部分に相当する。試掘調査では陶器川流域部で須恵器片が多数出土し、須恵器窯跡が近在すると推測された。また、東側の段丘部からゆるやかに低くなる部分では、須恵器片を含む河川などの流水堆積の様相を呈し、さらに中世遺物包含層や土坑、溝なども確認された。試掘調査の概要については、『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』6 2003に詳しい。

調査区はおおよそ東西方向に約500mのびる水路部分（1区～3区）と耕地整備によって削平される南側の段丘尾根上部分（4区）で、総面積は2240m²である。水路部分では東側から3区に区切って順次調査をすすめた（図17）。

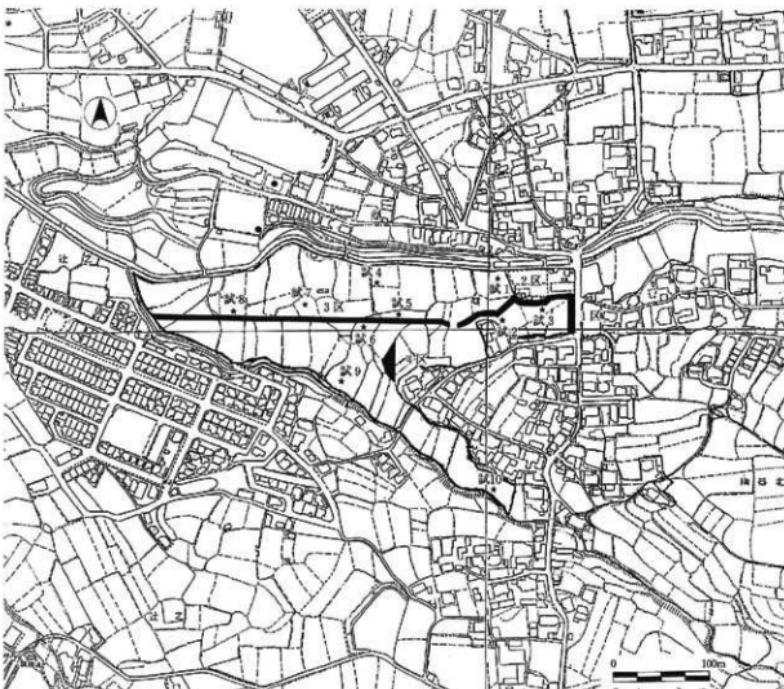


図16 陶器川地区調査地位置図

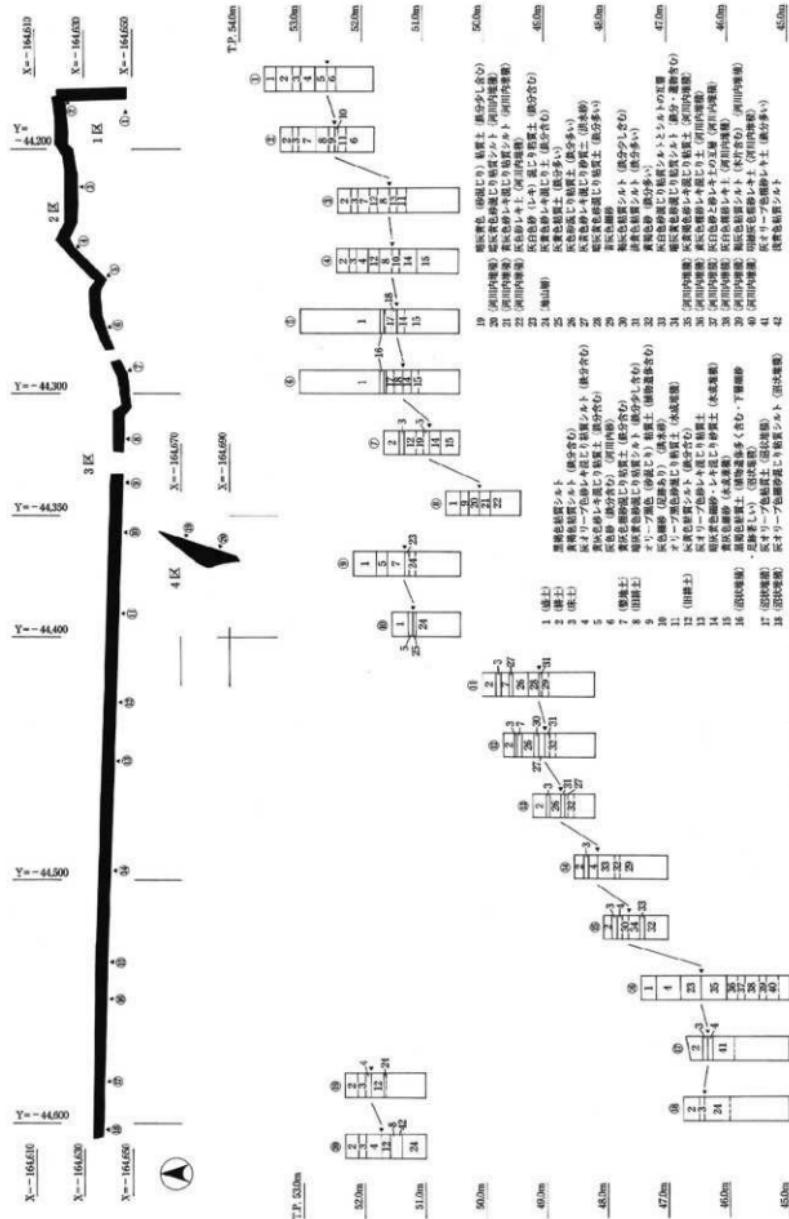


図17 滋賀地区調査区及び土層状況

1区は南北方向に短く延びる調査区で、北側の陶器川に向かってゆるやかに低くなる様相を示す。主な層序（図17-①～②）として、盛土（1）、および近・現代の耕作土層（2）、床土層（3）を除去すると、わずかに瓦器枕片、中国製青磁・白磁片など中世の遺物を含み、やや砂レキ土が混じる整地土層（4・7）や旧耕土層（5・8）が堆積する。北端部では、薄い砂層で覆われ足跡が顕著に残る河川の氾濫跡（9・10）がみられた。さらに下層では旧河川跡および氾濫原と考えられる砂レキ混じり土や砂層（6・11）が厚く堆積する。砂層内からは須恵器片が多く出土した。南側部では、溝跡、ピット、土坑などを検出した。東西方向に延びる溝5は自然地形に沿った流れをもつ。埋土はスミなどの炭化物を含む黒色砂レキ混じり土で須恵器片などが出土した。ピットの中には建物ピットと思われるものもあったが、建物プランは復元できなかった。埋土は炭化物を含む黑色粘質シルトで、須恵器壺片、坏身片などが出土した。

2区はおおむね東西方向に屈曲しながら延びる調査区で、東側の丘陵部端から西側に向かって徐々に低くなる様相を示す。また、土地開発に伴い本来池や沼、あるいは河川などの氾濫原であった低地部分に盛土や整地土を施し耕作地としている状況もみられた。

調査区東端部から屈曲部（図17-③～④）では、近・現代の耕作土層（2）、床土層（3）を除去すると、土師質小皿、瓦器枕、瓦質羽釜片、瓦など中世の遺物を含み、粗砂レキ土が混じる整地土層（4・7）や旧耕土層（12・8）が堆積する。さらに下層では旧河川跡および氾濫原と考えられる砂レキ混じり土や砂層（13・11・10・14・15）が互層を成し厚く堆積する。東側端部では北側の河川の氾濫跡である流路3、中央部では南北方向に流れる流路1、屈曲部では北側の河川の氾濫跡である流路2を検出した。並存するものではなく、流水と堆積を幾度となく繰り返していたものと思われる。流水堆積層から須恵器片が多数出土したほか、溶解物が付着し、変形した須恵器片が散在していた。平成13年度に実施された試掘調査（図16）では、試1区から須恵器片が大量に出土し、炭や焼土を含むことから、須恵器窯の灰原に起因するものと考えられている。おそらく河川の氾濫によって遺物が流され、流路埋土中に堆積したものと考えられる。

調査区東側の屈曲部から中央部（図17-⑤～⑧）では、厚い盛土（1）を除去すると、植物遺体や腐敗土を多く含み、下層に足跡がみられる水成堆積層（16・17・9・19）が広がる。池や沼などの浅い湿地であったと考えられる。その下層は中～近世代の遺物を含み、砂や小レキが混じる粘質シルト層（18・5・14・20・21）である。下面では石や瓦（溝18～21）、あるいは丸太、木板を用いた排水溝（溝31・32）を検出した。中～近世代の土地開発の際に造られた排水溝であると思われる。さらに下層では旧河川跡（河川179）あるいは氾濫原と考えられる細砂、砂レキ層（15・22）が厚く堆積する。須恵器片が多く出土した。調査区の西側部端では一気に1.2m程低くなり、現在も細い流路が流れる谷部となっている。調査当初、この流路の周辺では、背の高い蒲が一面に生い茂っており、やや湿地状を呈していた。整備された耕作地となる以前は、池や沼であったことがうかがえる。また、沼状の水成堆積層下に人工的な排水溝が施されていることから、池や沼となる以前は、やや安定した地盤（17）が形成されていたとみられる。2区の遺物包含層

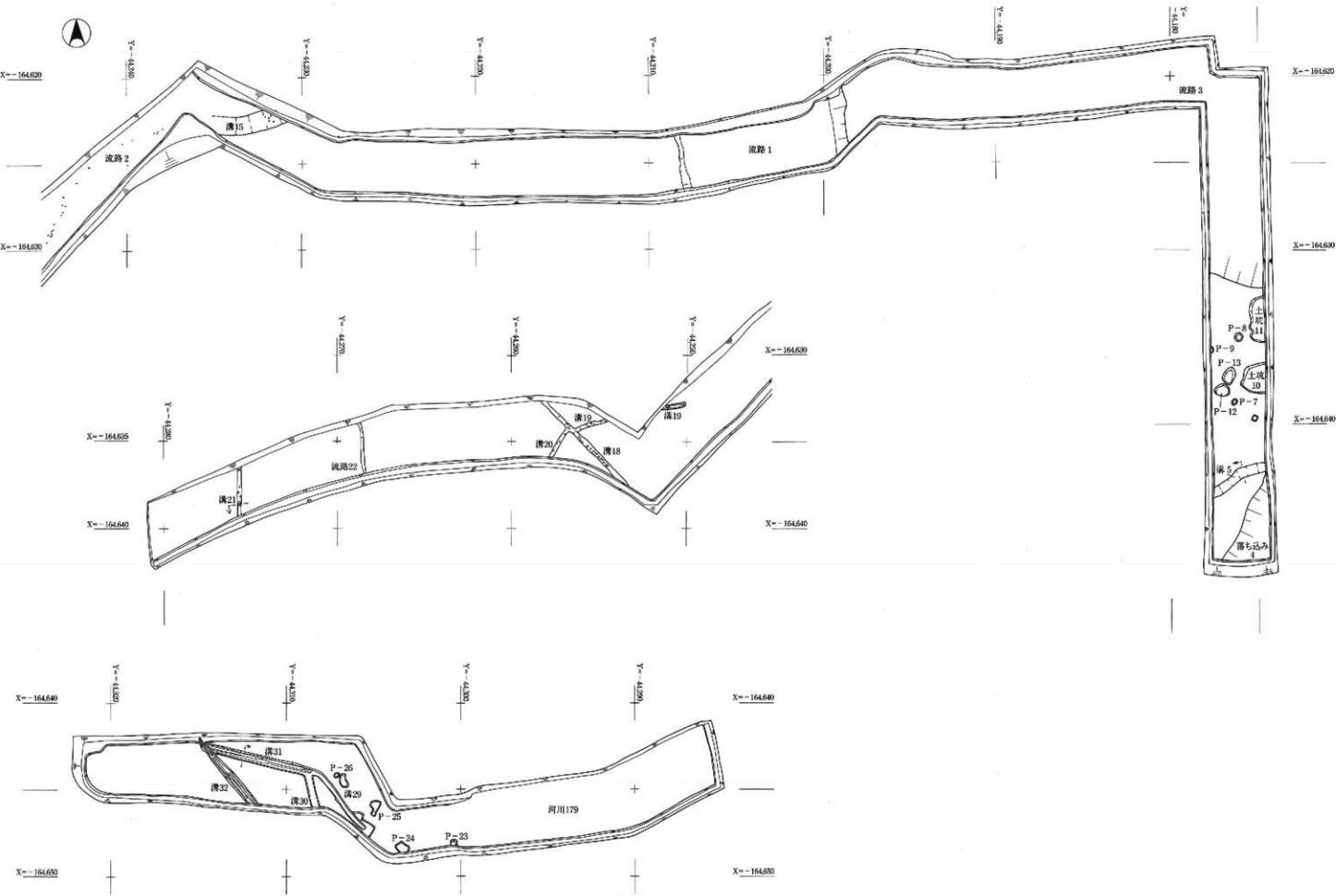


図18 陶器川地区 1~2区構造平面図

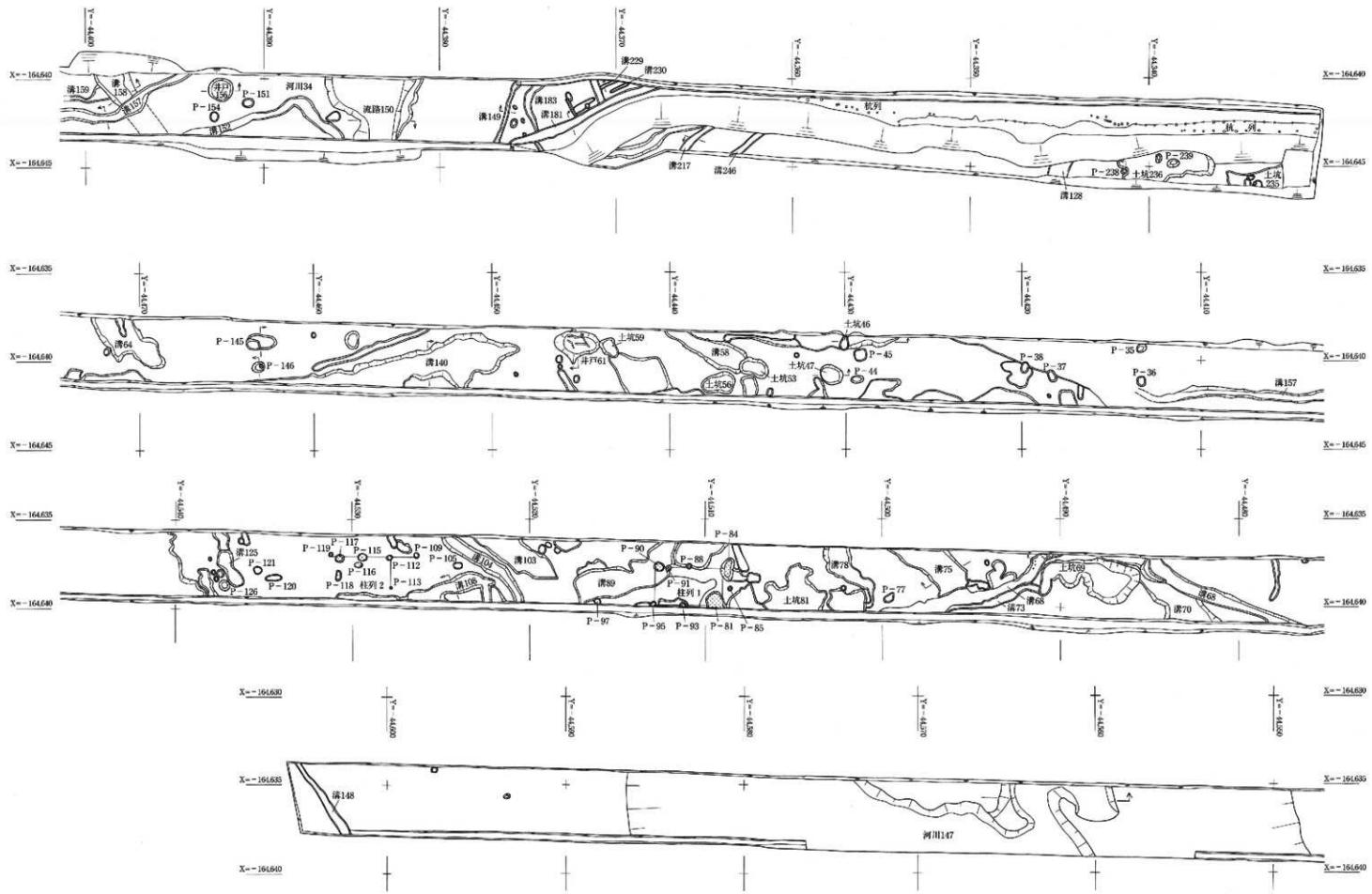


図19 陶器川地区3区遺構平面図

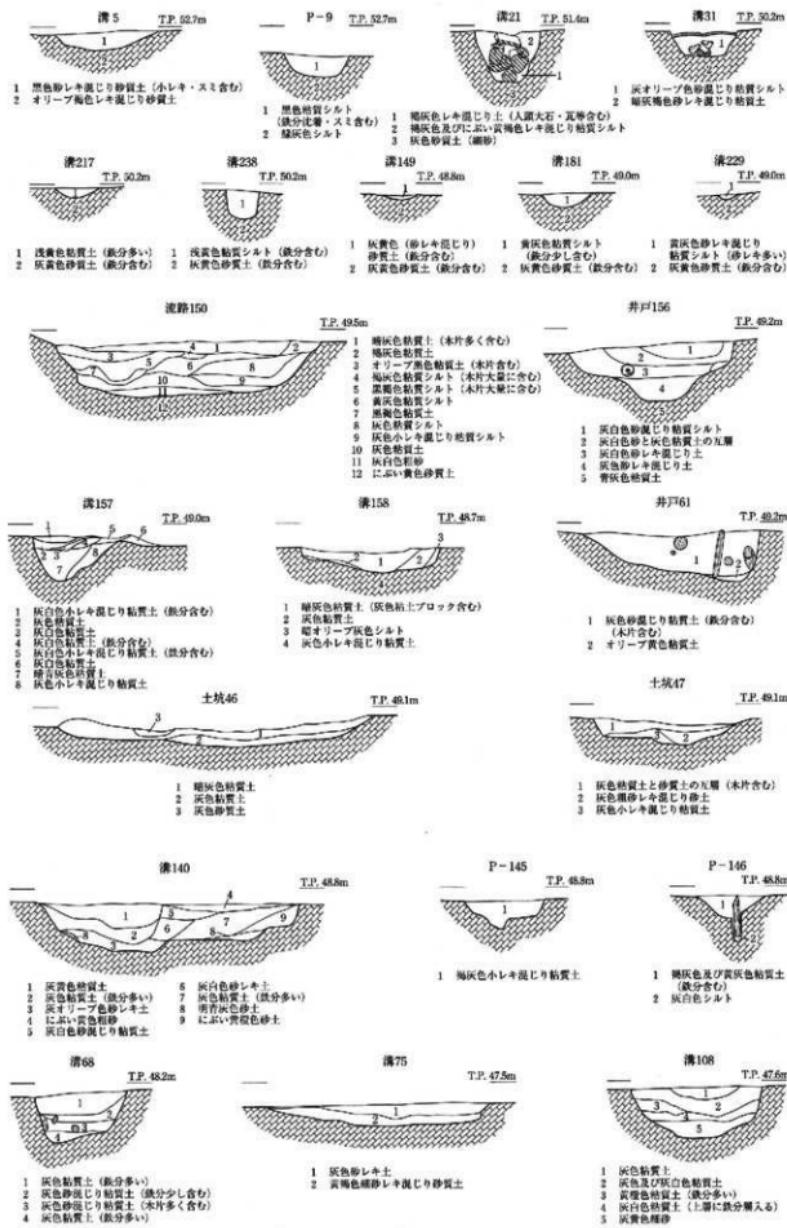


図20 陶器川地区1~3区遺構断面図

からは、黒色土器片、瓦器椀片、土師質土器片、備前焼片、瓦のほか、永楽通宝（図40-420）が出土した。

3区は東西方向に長く設定された水路部分にあたる調査区である。南側の丘陵尾根端部から一気に低くなる谷部と、北側を流れる陶器川と南側の谷部から流れる小河川の間に挟まれた氾濫原で、西側に向かってなだらかに低くなる様相を示す。

調査区の東端部（図17-⑨～⑩）では、南側の丘陵尾根端部と尾根部から一気に低くなる谷部を確認した。高低差は約2.5mを測る。南側の丘陵部上では、盛土（1）を除去すると旧耕土層（5）、わずかに黒色土器片、瓦器椀片などを含む整地土層（7）が堆積する。地山直上層（23・25）では、おおむね自然地形に沿って南北方向を呈す耕作溝跡（溝216・217）や土坑、ピット（P-238）などを検出した。埋土内からは黒色土器片、瓦器椀片、土師質土器片とともに、須恵器坏片、土師器片などが出土した。時期は特定できないが、中世以降に急な崖部を段状に削平、あるいは整地土を施すなどして耕作地としている状況がうかがえる。谷部では2区から続く旧河川跡あるいは氾濫原とみられる細砂・砂レキ層が厚く堆積する。また、丘陵尻部に沿って土砂の流失を防ぐためのものと思われる杭列がみられた。谷部の西側では、自然地形に沿った方向を示す耕作溝（溝181・229ほか）を検出した。瓦器椀片、須恵器坏片、甕などの細片が出土した。さらに西側では、砂や砂レキ土が堆積する河川跡（河川34）がみられた。浅い堆積層で一過的な流水であった可能性もある。埋土内からは、平底坏、台付坏、凝宝珠つまみ付坏蓋、底部糸切小瓶などの須恵器片、黒色土器片、土師器片などが出土した。河川堆積層を除去すると、浅い谷状地形になっており、南北方向に流れる流路跡や不定方向に伸びる溝跡、井戸などを検出した。流路跡（流路150）や溝（溝157・158・159）の埋土中に、植物遺体を含む黒褐色系粘質土の堆積層がみられ滞水時の様相がうかがえる。須恵器器台、甕、坏などの細片が出土した。井戸156は、上部が削平を受け下底部のみの検出であったが、筒状の素掘りの井戸である。埋土内の砂層から口顎部を欠く甕（図34-357）、坏身片、甕片などが出土した。

調査区の中央部（図17-⑪～⑯）は、北側を流れる陶器川と南側の谷部から流れる小河川の間に挟まれた氾濫原で、なだらかに西側に向かって低くなる様相を示す。耕作土層（2）、床土層（3）を除去すると、黒色土器片、瓦器椀片などを含む遺物包含層（4）や遺物を含む整地土層（7・26・28・30）が堆積する。また、河川の氾濫などの流水跡と考えられる薄い砂・砂レキ土層（27）が広範囲でみられた。下層はやや安定した粘質シルト層（31）で、溝状遺構や蛇行して流れる溝のほか、ピット、井戸、土坑などを検出した。西側では須恵器片や炭化物を多く含む遺物包含層（34）がみられ、層下では柱穴状のピットや土坑を検出した。さらに下層では、旧河川の氾濫原とみられる砂レキ混じり土や砂層（29・32）が堆積するが、部分的に地山層が確認された。検出した遺構として、土坑46は北側が調査区外になるため形態が不明であるが、わずかに炭化物を含む埋土中からほぼ完形の須恵器坏身（図25-125）や須恵質紡錘車（図39-418）のほか、多くの須恵器片が出土した。井戸61は上部が削平されているが、すり鉢状を呈する素掘りの井戸で

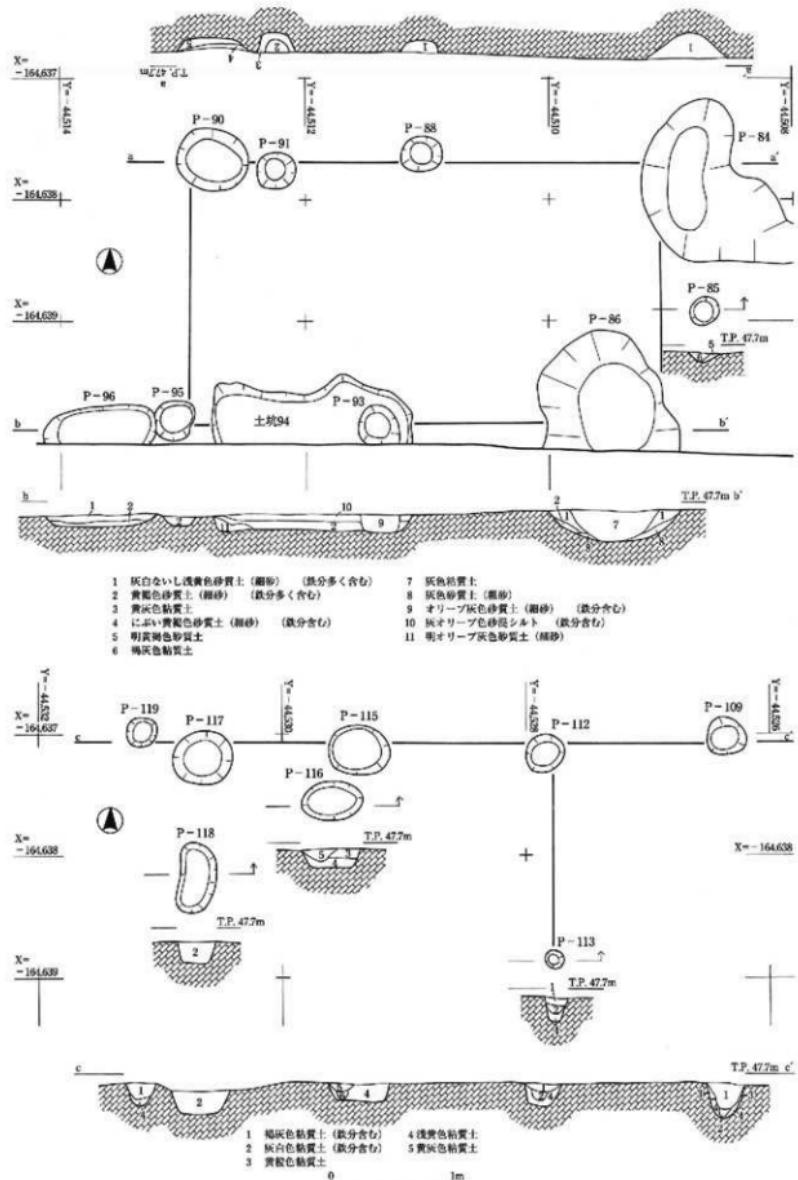


図21 陶器川地区柱列1・2平面及びピット断面図

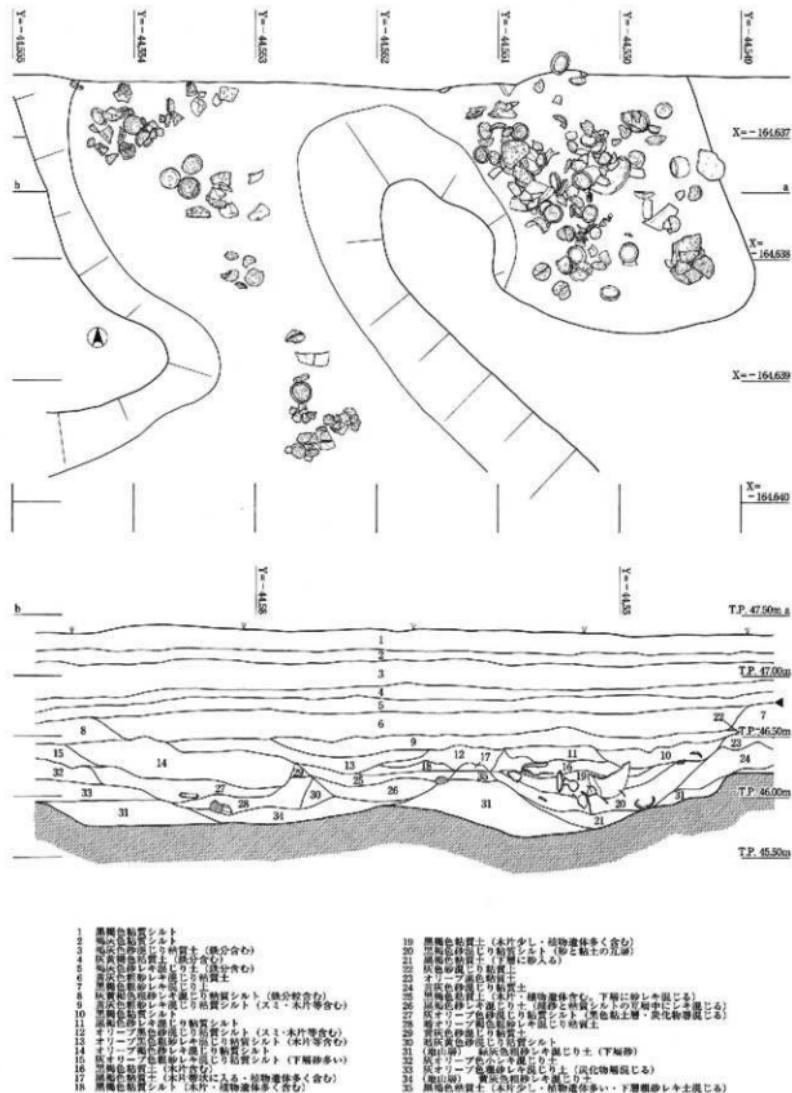


図22 陶器川地区河川147出土遺物平面及び土層断面図

ある。井戸内では、直立あるいは横方向を呈する丸太や角材が多くみられたが、用途は不明である（図版6-c）。須恵器片、瓦器片、陶磁器片などが出土した。溝68は、蛇行しながら流れの溝であるが、部分的に溝内を横断するように、また溝に即したように配した杭列がみられた（図版6-d）。陶磁器片、瓦器片、土師質土器片、須恵器片などが出土した。

調査区の西側では、須恵器片を多く含む包含層（4）下でいくつかのピット、土坑を検出した。建物と考えられる柱列がいくつかみられた（図21）。柱列1（P-90・91・88・84、95・93・86、85）は、東西方向に2列平行する柱列であるが、東西方向2間、南北方向1間以上の建物であると思われる。ピット内からは須恵器壺片、坏片などが出土した。柱列2（P-119・117・115・116・112・109・118・113）は、東西方向に並ぶ柱列が主で、柱根痕跡がみられるピットも含まれるが、建物を復元するには至らなかった。ピット内から須恵器坏片などが出土した。P-145では径10cmほどの柱根が残存していた。P-146では柱根痕跡がみられた。このほか、柱穴と思われるものはいくつかみられたが、建物を復元することはできなかった。しかし柱穴は底面が平らで杭痕などとは考えにくく、わずかではあるが建物があったことがうかがえる。

調査区の西側端（図17-16）では、旧河川跡（河川147）を確認した。耕土・床土層（2）を除去すると、砂や砂レキを含む整地土層（4）や旧耕土層（23）が厚く堆積する。瓦器片や土師質土器片、瓦などが出土した。さらに下層は、粗砂レキ土層（35・36・38・40）、砂層（37）、砂レキ混じり粘質シルト層（39）などが互層を成し河川内堆積の様相を示す。

検出した河川跡（河川147）は、東西方向の検出幅が約38mを測る。おおむね南側から北西方向に向かう流れと北側から蛇行して南西方向に向かう流れがみられ、複数の流れの合流部付近にあたる。中でも南側から北西方向に向かう流れが主流で、調査区南側の谷部から流れる河川跡と考えられる。この河川跡の流水域に沿って、直径約20cm、長さ約1.5mほどの丸太が數本並列して横たわっている状況がみられた。護岸の補強を施したものと推測される。あるいは、合流する河川の水量、水流方向を調整するものであった可能性がある。南側から北西方向に向かう流れ内から、須恵器片が多く出土した。北側から蛇行して南西方向に向かう流れの河川堆積土中からは、ほぼ完形の須恵器を中心とする6世紀後半の遺物が一括して出土した（図22）。須恵器坏身、坏蓋が大半をしめるが、高坏、壺、瓶、器台、堤瓶、壺など多機種みられた。このほか、ほぼ完形の土師器壺なども混在していた。須恵器の中には、焼き歪みのあるものや溶解し土器片が付着したものも多くみられた。おおむね、近隣の須恵器窯で焼かれた須恵器を河川を利用して搬出する途中に河川内に落ちたものか、また、搬出途中で破損したため河川内に廃棄したものか、あるいは、積出し時に製品として不都合なものを選別し廃棄したものと考えられる。概して、出土した須恵器はほぼ完形品であったが、焼き歪みの著しいものや、土器片が溶着したものが多く、製品としては粗悪の感があることから、不良品を選別し河川内に廃棄したのではないかと思われる。河川岸部の東側では、柱穴などもみられることから、近隣の須恵器窯で焼かれた製品の集積、積出し地であった可能性がうかがえる。

調査区の最西端(図17-⑯~⑰)では、近・現代の耕土層(2)、床土層(3)を除去すると、粗砂レキ土や砂質土などの地山層(41)となる。おそらく耕作地化の際に削平されたらしく、顯著な遺構は確認できなかった。

4区は南側の段丘尾根上に位置する調査区で、おおむね平坦な開削耕作地の様相を示す(図17-⑯~⑰)。表土層の耕作土(2)、床土層(3)を除去すると、土師質土器片、瓦器楕片をわずかに含む整地土層(4)、旧耕土層(12)が堆積する。層下からは、おおむね東西方向を示す耕作溝と流路跡、ピットなどを検出した。溝168・169は調査区内を蛇行して流れる流路跡で、一過的に流れたと思われる浅い溝である。耕作溝、流路跡の埋土内からは、瓦器楕片、瓦質皿片、瓦質羽釜片、須恵器坏身片などが出土した。

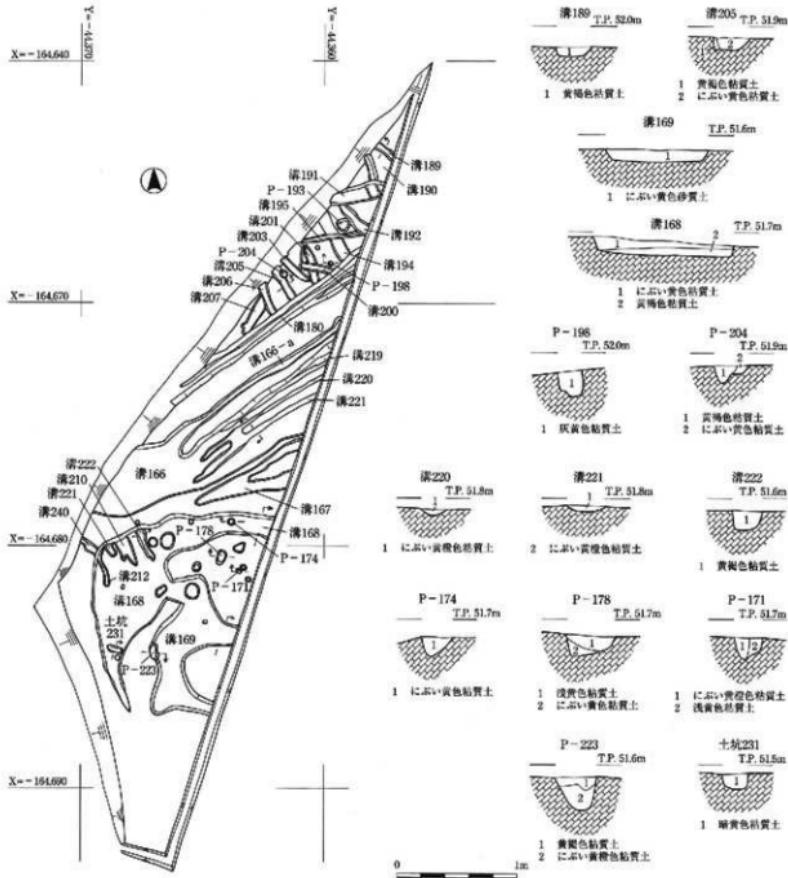


図23 陶器川地区4区遺構平面及び遺構断面図

調査区の北側から中央部（図17-⑩）では、旧耕土層（12）が重複しており、下層からも東西方向および南北方向に延びる耕作溝跡を検出した。瓦器椀片、土師質小皿片、土師質羽釜片、須恵器片などが出土した。さらに下層では、調査区の南側（図17-⑪）で須恵器片を含む旧耕土層（8）、整地土層（42）が堆積しているが、大部分は平坦な地山層（24）となる。土地開発の際に段丘部を開削し、耕作地としたものと考えられる。地山直上層からは、西側縁部で南北方向のスキ溝（溝219～222）を検出した。黒色土器片、須恵器片などが出土した。中央部ではいくつかのピット（P-170・171・174・178・231）と土坑（土坑223）を検出した。P-170は、柱穴と考えられるもので、埋土中からほぼ完形の須恵器坏蓋（図34-345）が出土した。この他、いくつかピットがみられたが、建物跡として復元できるものはなかった。土坑223は埋土内にスミを多く含むもので、須恵器坏蓋片などが出土した。

今回の調査では、陶器川を含む旧河川と南側の谷部から流れ込む河川による氾濫原の広がり確認することができた。また、河川内から須恵器などの遺物が一括して出土したことから、河川を利用して須恵器を搬送していた様相をうかがうことができた。出土した須恵器の中には、製品同志が溶着したもの、焼き歪みのあるものが多くみられたことから、搬出する際に製品として不都合なものを分類し、廃棄したものと考えられる。調査区内で須恵器窯の存在は確認できなかつたが、平成13年度に実施した試掘調査では、南側の谷部周辺（試10区）で須恵器窯の灰原を確認しており、コンテナ約10箱におよぶほぼ完形品の須恵器と焼土塊、スミなどが出土している。また、調査区北側の陶器川沿い（試1区）から須恵器片が大量に出土し、炭や焼土を含むことから、須恵器窯の灰原に起因するものと考えられている。いずれも、河川に沿った地域に須恵器窯が想定されることから、河川を利用して須恵器の搬出を行ったものと推定される。さらに、検出した河川岸部付近で、建物跡がみられたことから、近隣の須恵器窯から製品を集荷し、積出する作業場であったとも考えられる。陶器川と南側の谷部から陶器川に流れ込む河川が合流する立地条件を生かし、流通の拠点になっていたことがうかがえる。

陶器地区近郊において、須恵器生産が終焉を迎えたあの状況は不明瞭であるが、平安時代末頃から周辺地は耕作地になっていたと考えられる。瓦器椀片、黒色土器片などを含む中世代の整地土層は調査区の広範囲で確認された。また、丘陵部などでは土地を開削していた状況がうかがえ、幾度となく耕作地として土地開発や土地改良が行われていたと推測される。

陶器南遺跡の周辺は、都市化が進む大阪にあっても、田園風景が広がる地域であるが、古代の一時期においては、河川を利用して須恵器などの多くの製品が行き交う活気あふれた地域であったと推測される。今回の調査では、河川を利用した須恵器の製品流通の一端を垣間見ることができたが、流通経路や手段等の実態と周辺環境を明確にすることは出来なかった。また、中世代以降における土地開発の様相をうかがえたが、確たる状況を把握するには至らなかった。今回の調査成果を踏まえ、今後の発掘調査で明らかになることを期待したい。

b. 陶器川地区発見遺物

①石器 (図24 図版13)

古墳時代以前の遺物にサスカイト製石器がある。石鎌 (117) は凹基式で縄文時代後・晩期のものである。最大長2.5cm、最大幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。スクレイパー (120) は最大長6.1cm、最大幅3.6cm、厚さ0.6cmを測る。その他、剥片 (118・119) がある。

②古墳時代の須恵器 (図25 図版12・13)

須恵器壺蓋 (121～123) は口縁端部に段があり、体部外面には稜線を施す。天井部を欠損する。壺身 (125～128) は口縁部の立ち上がりがほぼ直立するもの (125) と内傾するもの (126～128) があり、端部にはいずれも段をもつ。

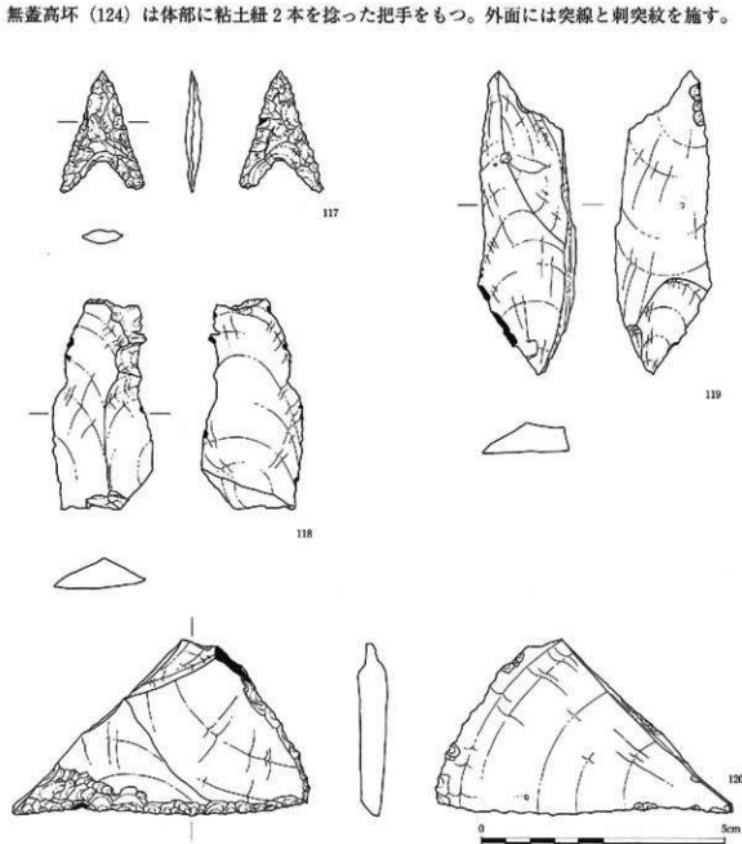


図24 陶器川地区発見の石器

短脚高坏（129～132）は脚部外面をカキ目調整するもの（131・132）とナデ調整するもの（129・130）がある。透かし穴は三角形で3方向のもの（130・132）と、長方形で2方向（131）のものがある。いずれも脚端部は直立し、やや尖りぎみである。

甌（133～136）はいずれも小片である。把手部分（135・136）は棒状に作り出す。上面を切り込むものもある（135）。焼成は甘く色調は灰白色・乳白色を示し、他の須恵器と駁別できる。

甌口縁は端部を下方に屈曲させるもの（137・144）、端部を上方につまみ上げるもの（139・145）、端部を内傾させるもの（141）、口縁端部を丸くおさめて頸部の短いもの（142）、長いものの（146）、端部が上下方向に拡張するもの（143）など様々である。頸部外面には波状紋（137～140）、刺突紋（141）を施したものがある。

③古墳時代の須恵器—河川147—括出土土器—（図26～33 図版表紙・7～13）

河川147の土器より多量の須恵器・土師器が一括で出土した。

壺蓋（147～149）は天井部が低く、口縁端部を内側に折り曲げたもの（147）、天井部の断面形は丸く、口縁端部に段をもつもの（148）、天井部は丸く口縁端部も丸くおさめるもの（149）がある。いずれも口径が小さく、壺蓋と考える。

壺蓋は大きく分けて口縁端部に段をもつもの（150～152・154～161・163～167・195～204・206～212・231～242・264～271）と、もたないもの（153・162・168～170・205）に大別できる。段をもたないものには、外面体部の沈線がなく、口縁部と体部の境が不明瞭なもの（168～170）がある。また、段をもつものの中には天井部内面に當て具痕を残すもの（198・238・268～271）、口縁端部に圧痕の残るものもある（170・205）。口径は13.0cm～16.0cm、器高は4.0cm～5.0cmにおさまる。

壺身も壺蓋と同様に、端部に段をもつもの（171・175・176・178・180・214～218・220・221・230・243～247・249～251・274～281）と、端部に段をもたず丸く仕上げるもの（172～174・177・179・181～194・213・219・222～229・248・252～263・272・273・282～286）に大別できる。両者は口縁部が内傾し、器高が低く、底部が平らなものが多い。とくに、口縁端部に段をもたないものには口縁部が強く内傾し、立ち上がりが短いものもある。また、内面見込みに當て具痕を残すもの（272～286）もある。口径は11.0cm～15.0cm、器高は3.5cm～5.5cmを測る。

高坏蓋（287～290）は天井部に扁平なつまみをもつ。壺蓋と同様に体部に沈線、口縁端部には段をもつ。天井部にカキ目調整を施し、口縁端部に圧痕が残るものがある。

高坏は無蓋（295～297）と有蓋（298～300）がある。無蓋高坏（295・296）は壺蓋の体部に短脚をつけたもので、口縁端部・脚短部ともに丸く仕上げる。有蓋高坏はいずれも長脚二段透かしをもつと考える。体部は壺身がとりつき、口縁短部は直立気味で、段をもつもの（298）と、丸く仕上げるもの（299・300）がある。脚部（304）は長方形二段透かしで、脚端部を折り曲げて丸く仕上げる。脚部の透かしは円孔（291・292・295）、長方形（293・296）、長方形二段（304）のものがある。

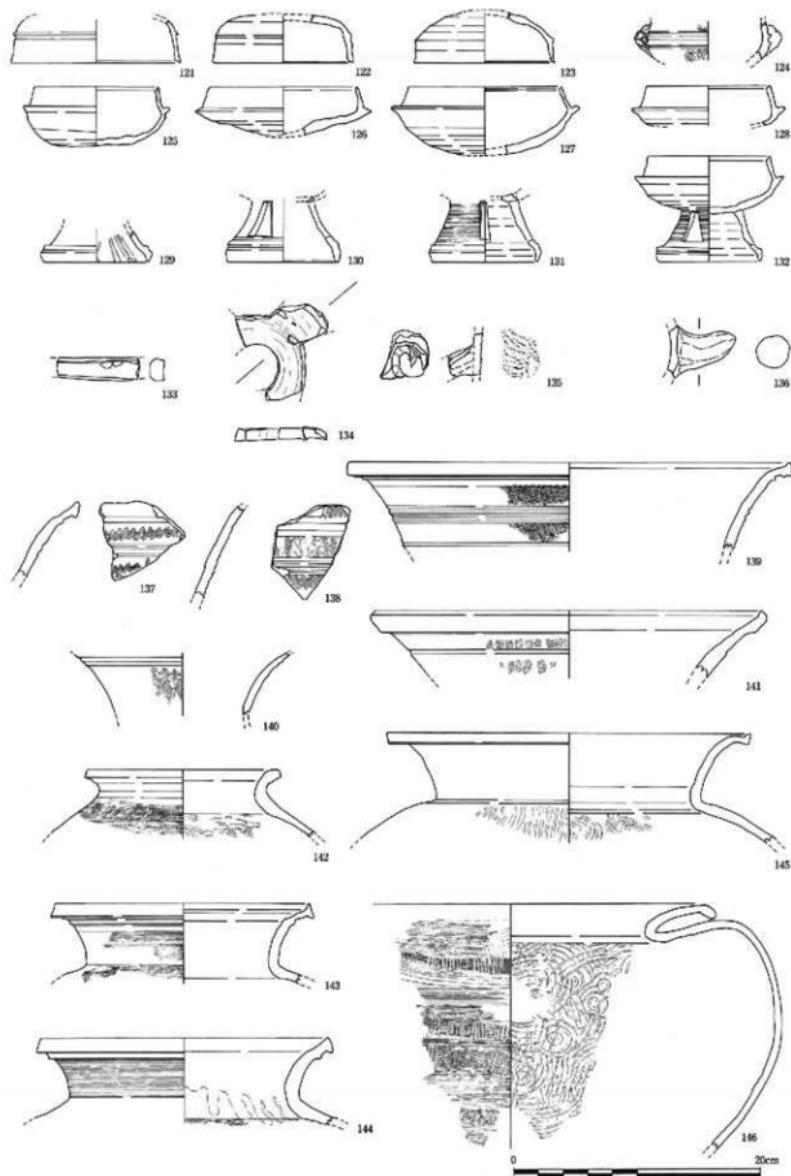


図25 陶器川地区発見古墳時代の須恵器

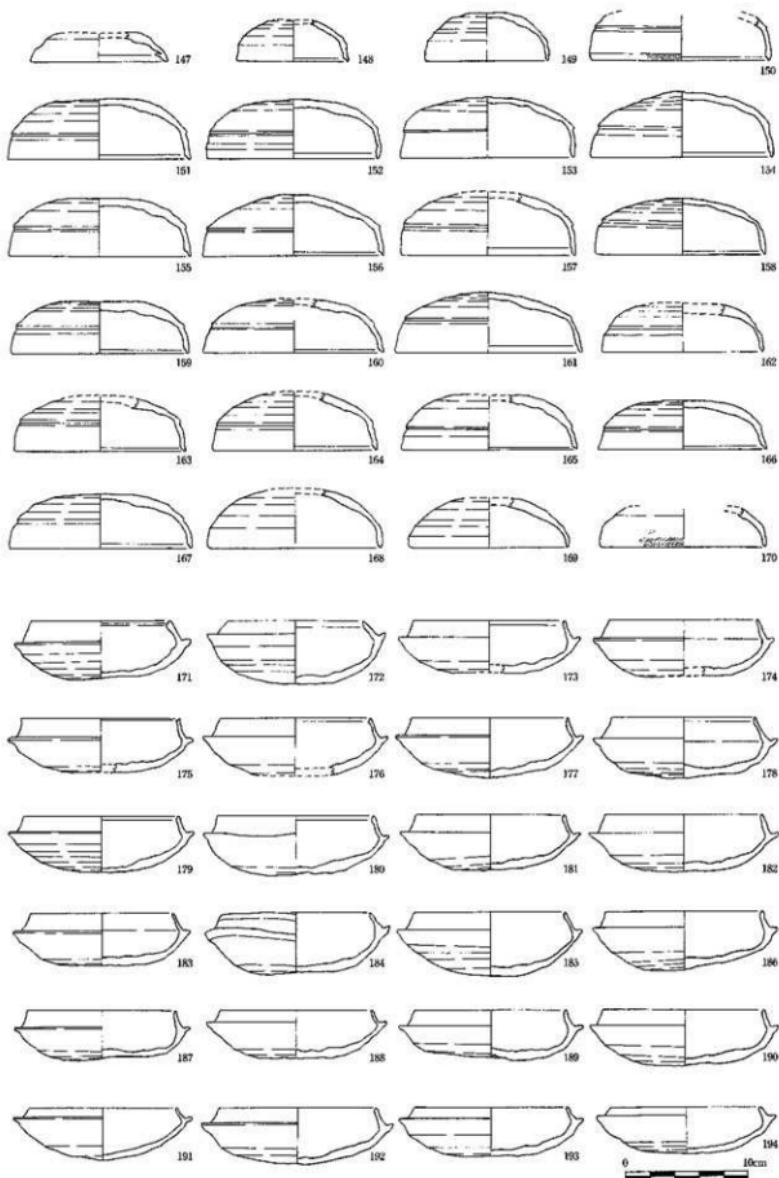


図26 陶器川地区河川147—括出土須恵器（1）

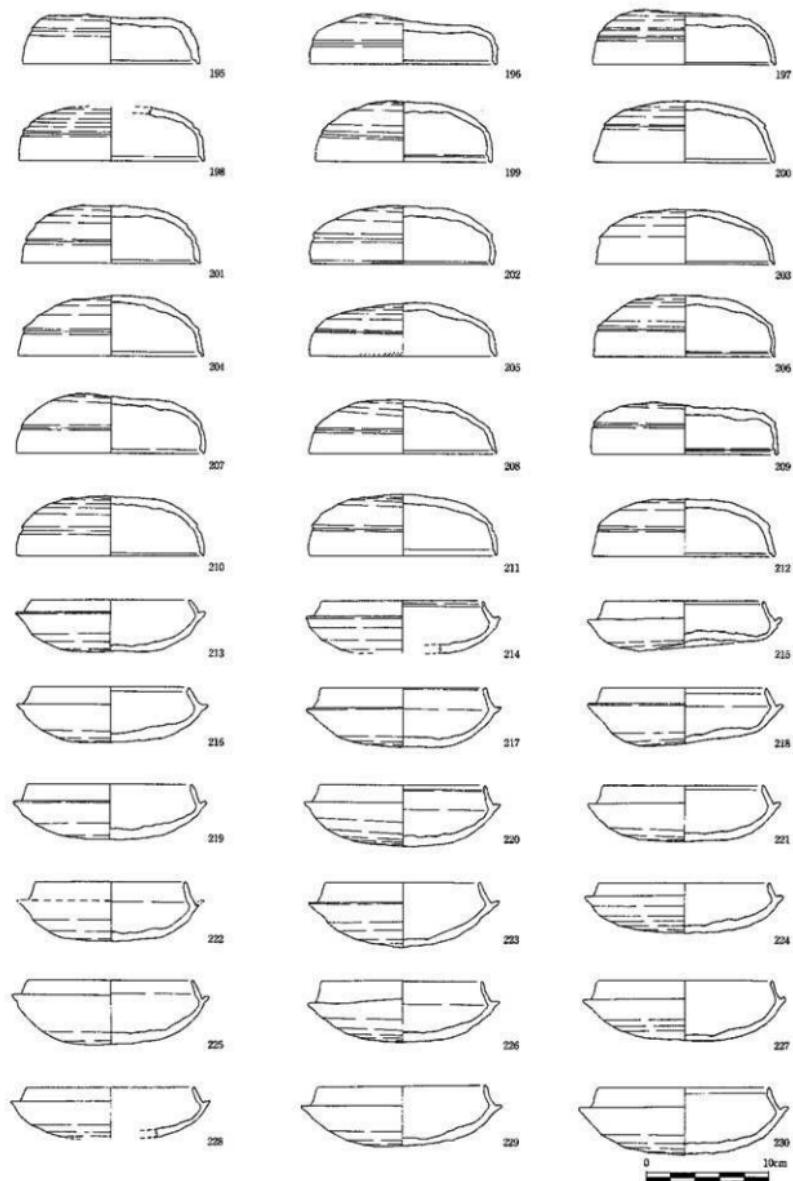


図27 陶器川地区河川147一括出土須恵器（2）

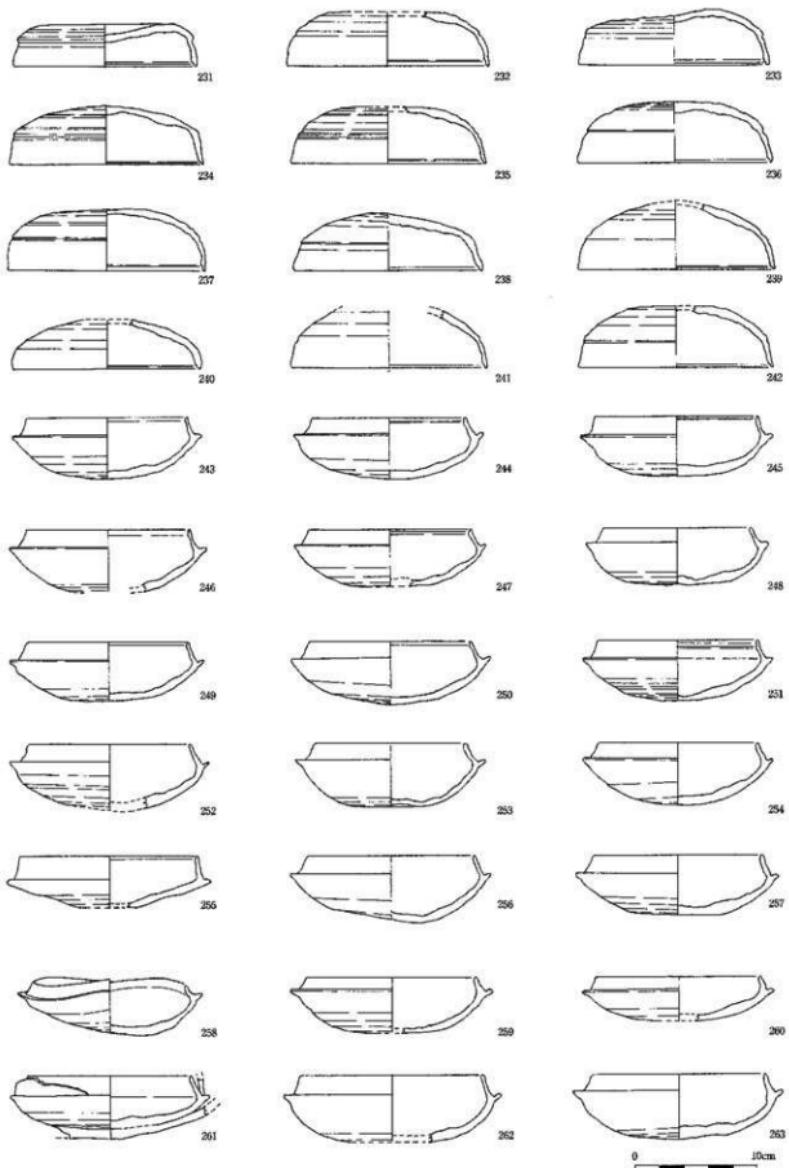


図28 陶器川地区河川147—括出土須恵器（3）

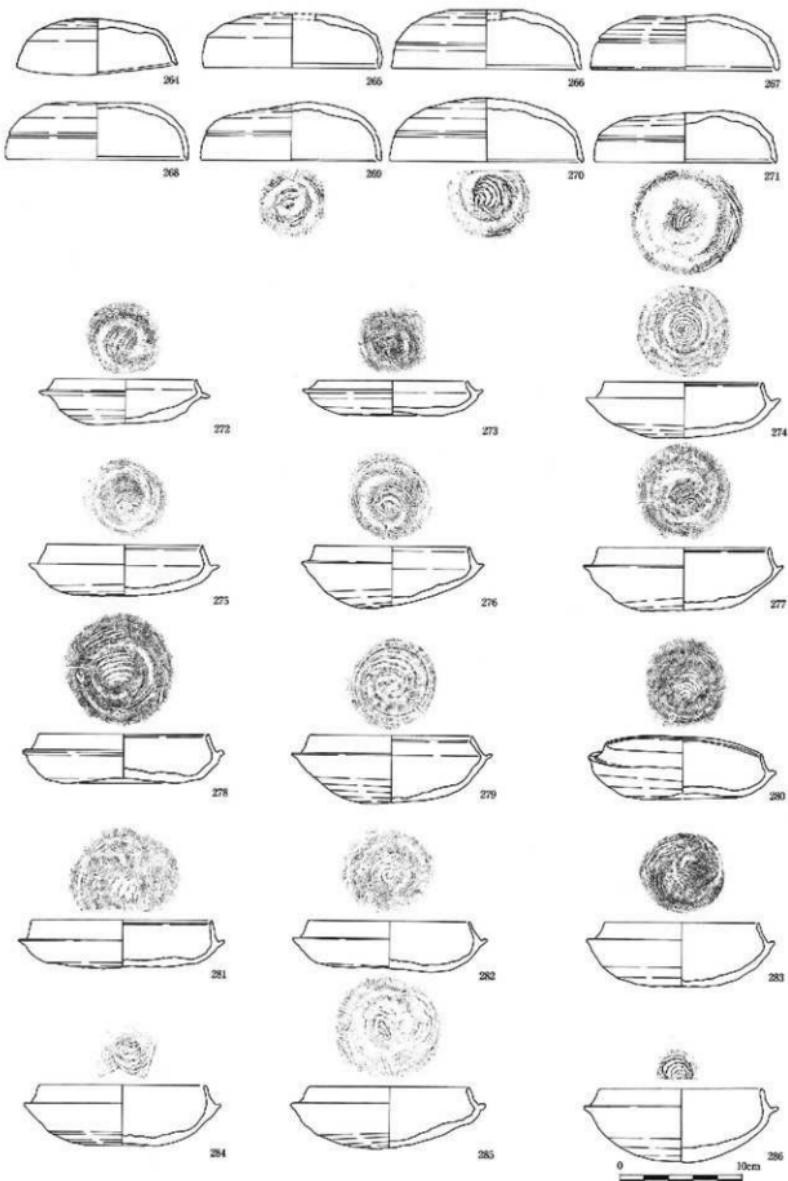


図29 陶器川地区河川147—括出土須恵器（4）

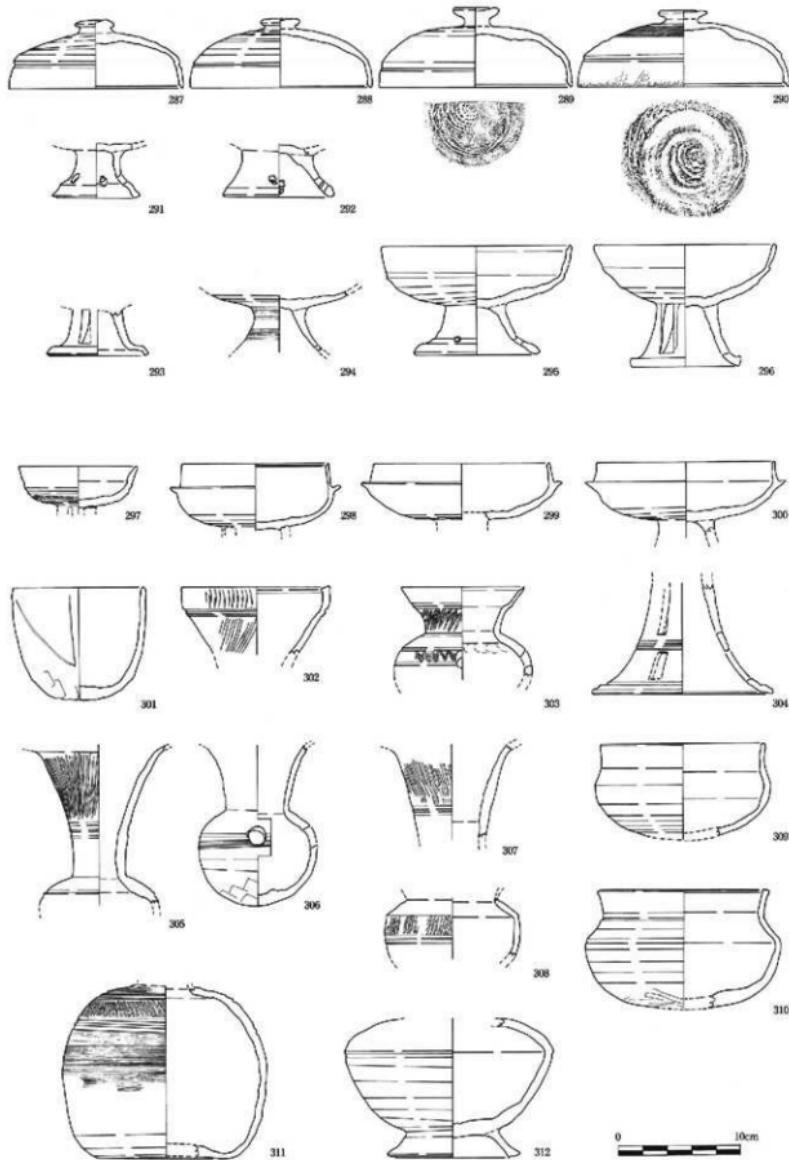


図30 陶器川地区河川147—括出土須恵器（5）

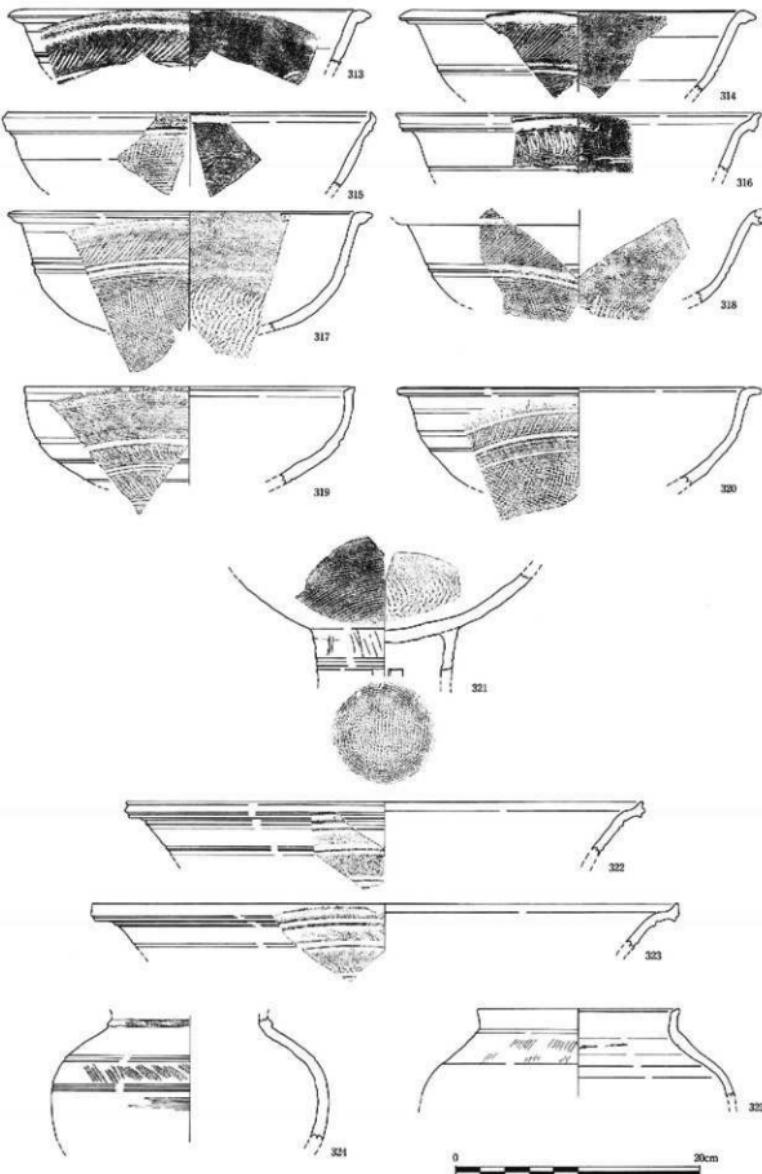


図31 陶器川地区河川147一括出土須恵器（6）

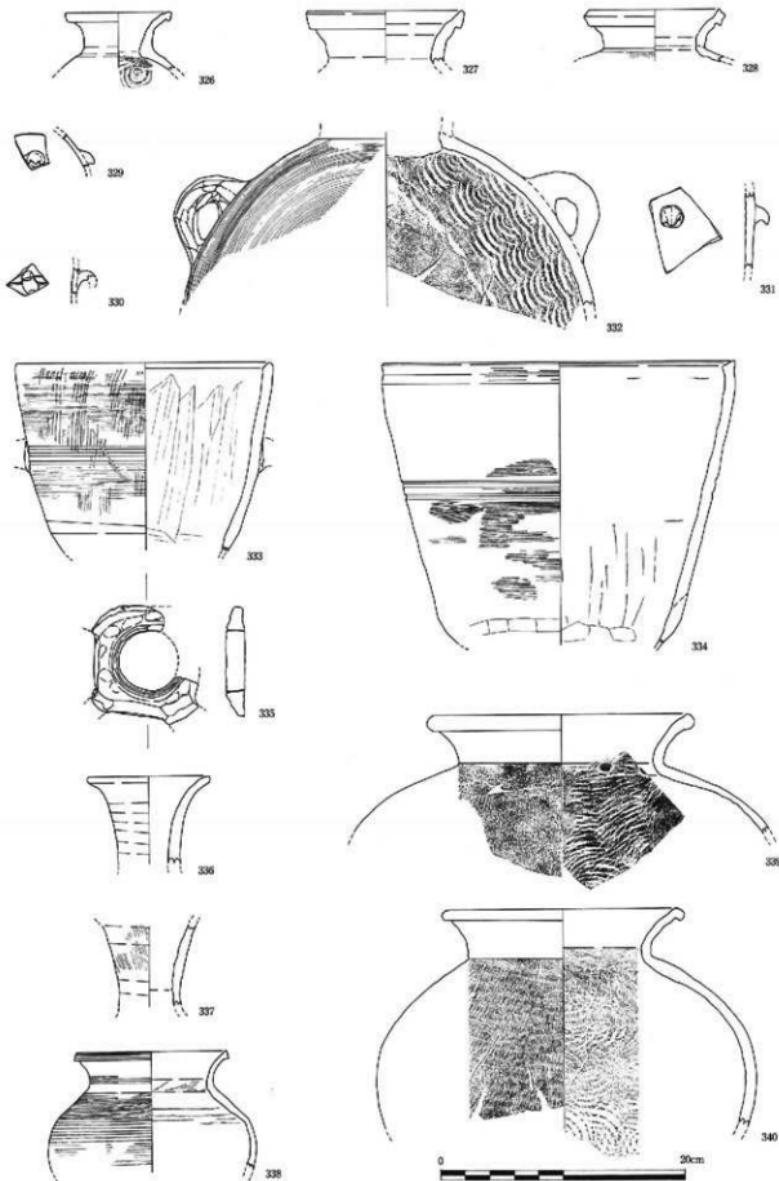
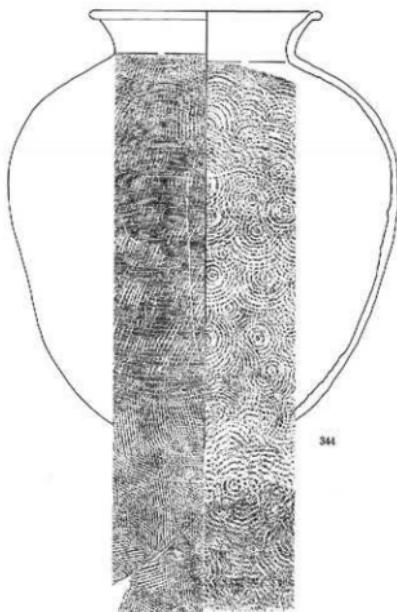
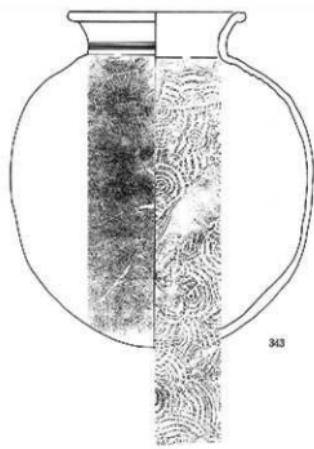
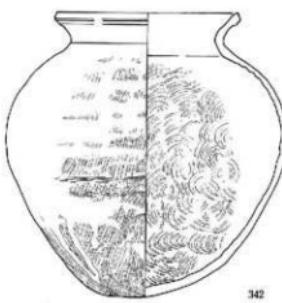
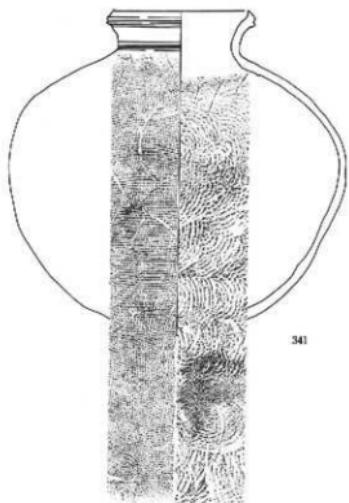


图32 陶器川地区河川147—括出土須惠器（7）



0 50cm

図33 陶器川地区河川147一括出土須恵器（8）

鉢（301）は口径10.6cm、器高9.2cmを測る。外面体部にはヘラによる数条の筋、体部下半にヘラ削りが施される。木器の模倣品か、類例を知らない。

甌（302・303・305～308）は頸部外面や体部にヘラ描きによる装飾（302・305・307）を施す。波状紋（303）、刺突紋（308）、無紋（306）である。頸部はラッパ状に開く肥大化したもので、中央部に沈線で区画し、上半部に加飾する（305・307）。

壺（309～312・324・325）は短頸・長頸・台付きなどがある。短頸壺は口縁端部を丸くおさめるもの（309）と、やや平らに仕上げるもの（310・325）がある。平らな底部をもつ壺（311）は、口縁部は欠損しているが肩部から頸部にかけて加飾する。体部はカキ目調整後、頸部付近に2条の沈線によって区画された中に刺突紋を施す。頸部と体部の境に帯状に粘土を貼りつける壺（324）は刺突紋を施す。また、体部を2条の沈線によって区画し、中に刺突紋を施す。

器台（313～323）は口縁端部に多様性がある。横方向もしくはやや下方向に向けて拡張したもの（313・314・317・318）、ての字状に拡張したもの（320）、口縁端部を上方につまみ上げたもの（315）がある。口縁部直下の外面にはカキ目調整後ヘラ描きが施される。口縁端部が外反し、上方向に若干引き上げられ、断面形が三角形を呈するもの（316）は口縁部直下外面に波状紋が施される。また、口縁部が内湾気味で、端部を平らに仕上げるもの（319）は、体部下半部に刺突紋を施す。内面見込みは同心円タタキ、外面下半部は並行タタキ痕が残る。

提瓶の口縁部は外反させた端部を外側に折り曲げる（326～328）。円環状の把手をもつもの（332）の他に、形骸化し、痕跡化したもの（329～331）がある。

瓶（333）は口縁端部が平らで焼成が甘い。外面を格子目タタキ後にカキ目調整する。底部付近は不定方向にヘラ削りを行っている。外面をカキ目調整、底部付近はヘラ削りをする瓶（334）は把手の位置に2条の沈線を施す。底部に円形の孔をあけるもの（335）がある。

壺は口縁端部を丸く仕上げるもの（339・340・342～344）、端部を上方につまみ上げるもの（323・341）、断面三角形を呈し、外形に2条の沈線がめぐるもの（332・338）がある。体部外面は格子目タタキ後にカキ目調整し、内面は同心円紋が残る。

④飛鳥時代～平安時代の須恵器（図34～36 図版13）

飛鳥時代（古墳時代後期）の坏蓋（345～348）は天井部が丸く、折曲部に粗い沈線を施す。口縁端部に段をもつもの（346～348）、もたないもの（345）がある。

坏身（349～353）は口縁部の立ち上がりが短く内傾し、器高は低い。坏蓋、坏身ともに内面に当て具痕が残るもの（347・348・352・353）がある。

台付鉢（355）は長方形の透かしを三方にいれる脚をもち、体部に把手を貼りつける。体部中央には刺突紋を施すが粗い。

甌（356～358）は体部を平行する沈線で区画し、その間に刺突紋で加飾する。

短頸壺（359）は肩部から内側に屈曲して短く立ち上がる口縁部で、端部は細くとがる。外面はカキ目調整を行う。

器台口縁部（360～362）は端部が内湾気味で玉縁状のもの（360）、外反し三角形のもの（361・362）がある。（360・362）は外面にヘラ描き、（361）は波状紋を施し、器台の可能性が高い。

器台脚部（363・364）は長方形の透かしをもち、体部には波状紋を施す（363）。ドーム状の脚部にカキ目調整を施し、中央部にはヘラ描きによる装飾を施すもの（364）もある。

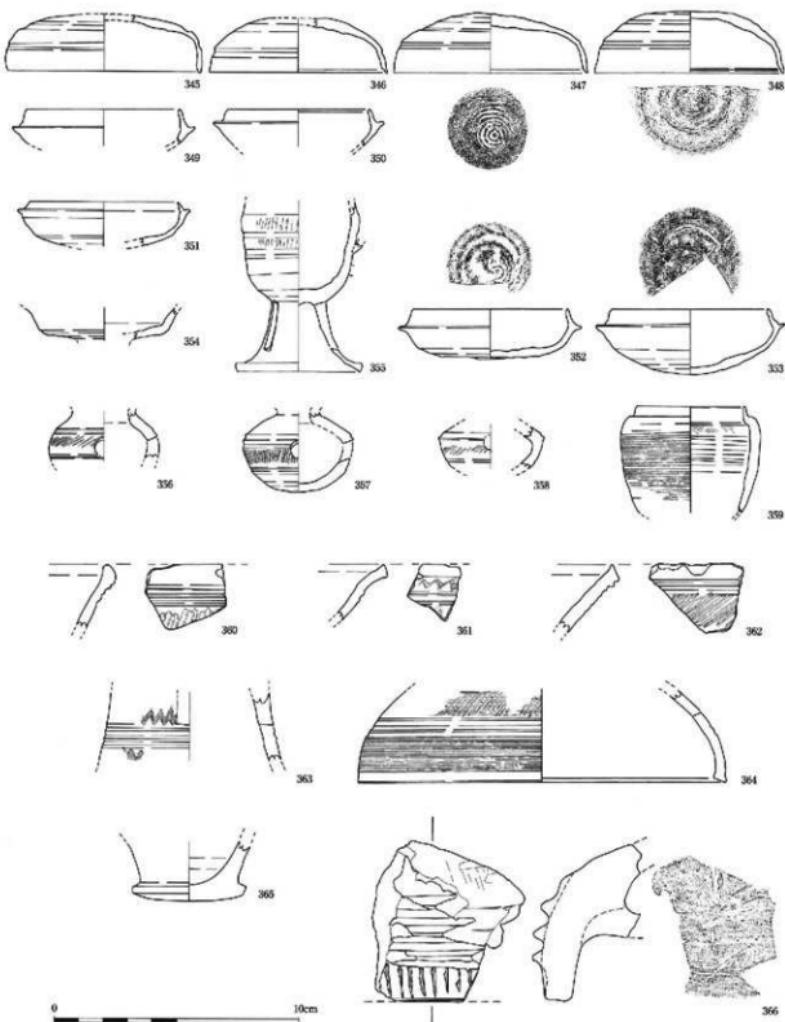


図34 陶器川地区発見の飛鳥時代須恵器

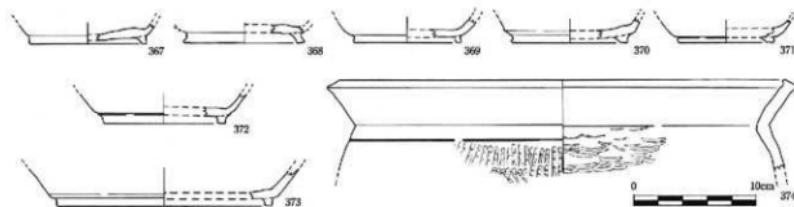


図35 陶器川地区発見の奈良時代須恵器



図36 陶器川地区発見の平安時代須恵器

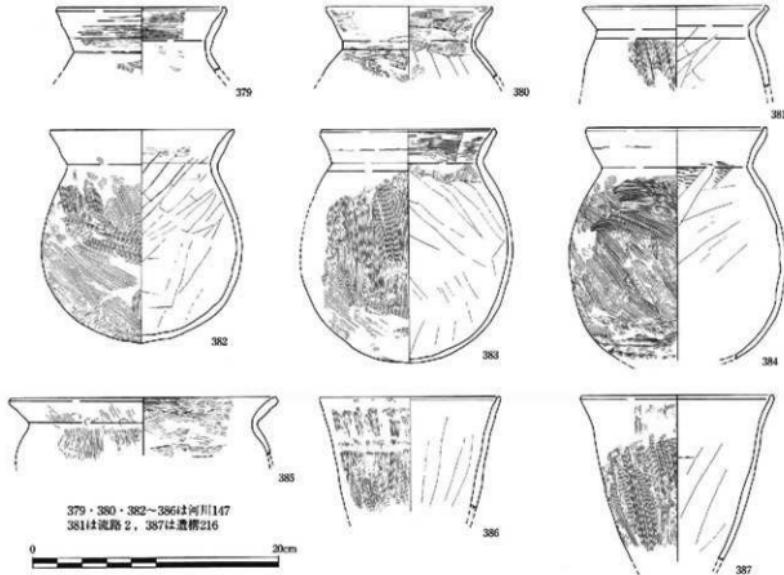


図37 陶器川地区発見の古墳時代土器

陶棺蓋（366）は外面を縱方向にヘラ描きし、その上に粘土紐を幾筋か貼りつけて装飾する。貼りつけ部分はヘラ削り、もしくは段をつける。内面に布目痕が残る。これまで陶器窯跡で発見されている陶棺にも瓦の製作技法に共通する布目を施すものがあり、製作時期を推定できる。その他に無蓋高坏（354）体部、こね鉢（365）底部などがある。

奈良時代の須恵器坏（367～373）は高台をもち、高台端部は平たい。いずれも小片である。

甕（374）は口縁端部を平らに仕上げ、体部内面に同心円紋、外面は格子目タタキを施す。

平安時代の小甕（375）は厚い底部に右回転糸切痕をもち、底径4.3cmを測る。その他、底部径5.9cmを測るものもある（378）。

碗（376・377）は厚い底部に右回転糸切痕をもつ。

いずれも平安時代前期のもので、陶邑窯跡群では末期のものである。

⑤古墳時代の土師器（図37 図版13）

甕は口縁端部をつまみ上げるもの（379～381・383・384）、口縁端部を丸く仕上げるもの（382）、口縁端部を平らに仕上げ、沈線をもつもの（385）がある。体部は長胴形でハケ目を施し、底部は丸い。長頸甕は口縁端部を丸く仕上げ、外面にハケ目を施す（386・387）。

（379・380・382～386）は河川147一括土器で6世紀後半代のものである。

⑥中・近世の遺物（図38 図版13）

中国製白磁・青磁、瓦器碗・皿、瓦質・土師質羽釜などがある。その他、丹波焼鉢、堺漆塗すり鉢、肥前磁器などが出土しており、近世のものである。

中国製白磁碗（388）は口縁端部を外反させる。白磁碗の底部（393・394）は高台無釉裏で、内面に沈線がめぐる。見込みに蛇目釉ハギを施す。いずれも12世紀前半代と考える。

青磁碗（389）は内外面ともに口縁部直下に稜線がめぐる。青磁蓮弁紋碗（390・391）は蓮弁を写実的に表すもの（391）と、紋様化が進んだもの（390）がある。前者は13世紀前半、後者は13世紀中頃の作と考える。見込みに印刻で草花紋が施されるもの（392）もある。

瓦器皿（396・397）は器高が低く、口縁部のナデは強い。瓦器碗は高台がしっかりとし、暗紋が緻密に入るものの（398～401）、高台が形態化しつつあるものの（401～405）がみつかっている。前者は12世紀末、後者は13世紀前半の製作だろう。

土師器皿（406）の口縁部は若干端反りぎみで、口径14.8cm、器高2.2cmを測る。

瓦質羽釜（409・410）の口縁部は内傾し、外面に沈線がめぐる。体部内面はハケ調整、外面はヘラ削りを施す。いずれも14世紀代の特徴を示す。口径は24.7cmと30.0cmを測る。

土師質羽釜の口縁部は内傾するもの（411・414）と、口縁端部を外反させるもの（412）がある。口径は20～21cm程度である。

火鉢（407）は口縁部直下で屈曲する土師質土器である。体部内面はハケ調整、外面はヘラ削りを施す。16世紀後半代のものか。

焙烙（408）は底部外型成形で、口縁部はやや内傾するが直線的に立ち上がる土師質土器であ

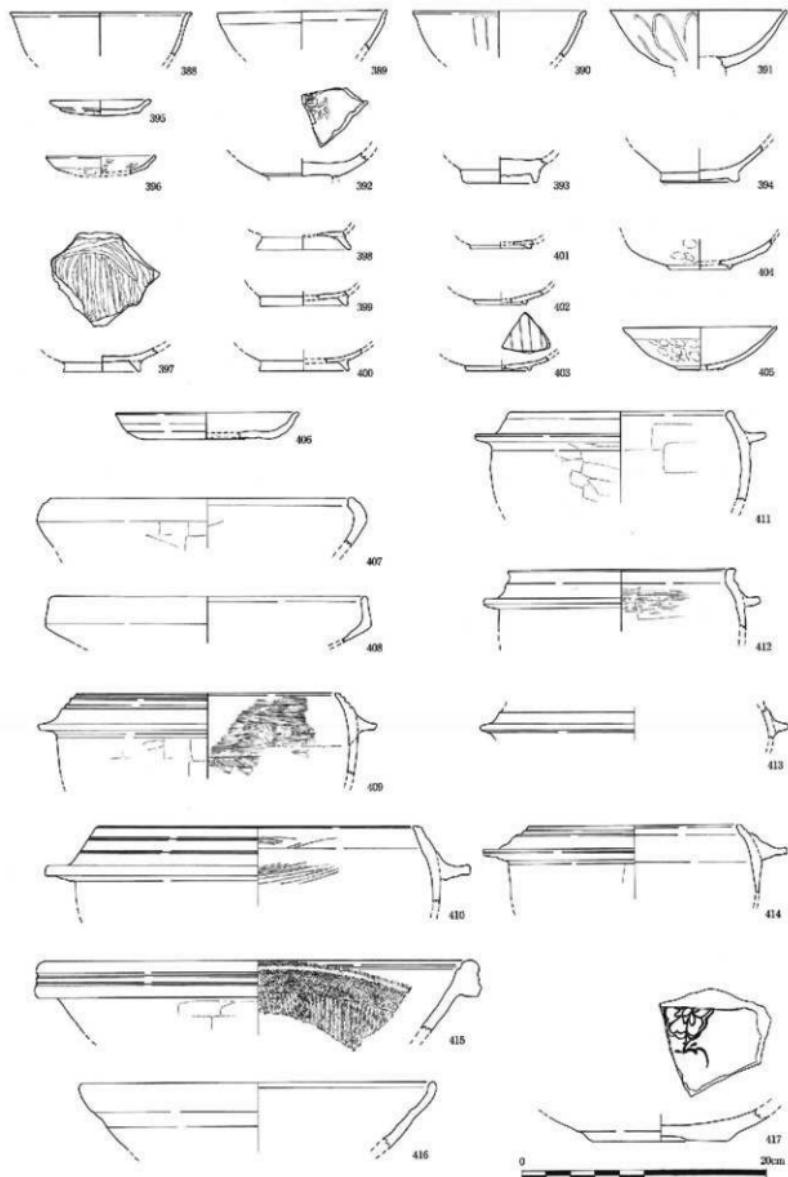


図38 陶器川地区発見の中・近世遺物

る。底部外面には離れ砂が付着する。19世紀代のものである。

堺・明石焼系すり鉢（415）の口縁外縁帯は三角形に大きく張り出す。口径35.2cmを測り、10本単位のすり目をもつ。19世紀代のものである。

丹波焼鉢（416）は口縁部が内湾し、端部を平らに仕上げる。17世紀代のものである。

肥前磁器青磁染付皿（417）は蛇ノ目高台で、内面見込みに染付の花紋を描く。17世紀後半のものである。

これら、近世末期の遺物も自然河川上面に含まれることから、今回発見された河川のうち、流路の一部が長期間に渡って機能しつづけたことを推定することができる。

⑦その他（図39・40 図版13）

紡錘車（418）は古墳時代後期のものと考える。須恵質で直径4.2cm、器高1.5cmを測る。外面はナデて仕上げる。これまでに陶器窯跡で滑石製品の紡錘車がいくつか発見されている。須恵器作り以外の生業を推測させる資料である。

錢貨は永樂通寶（420）と新寛永通寶（419）がある。前者は直径2.5cmで模鋳錢か。後者は2区の流路から出土した。直径2.4cmを測る。

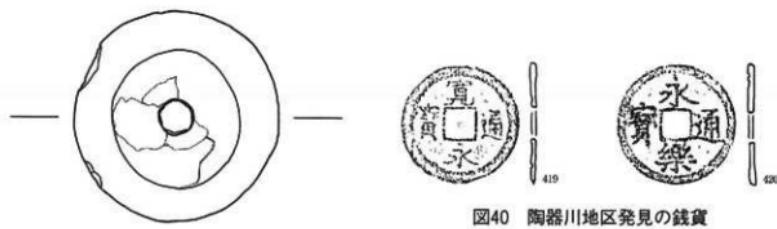


図40 陶器川地区発見の錢貨

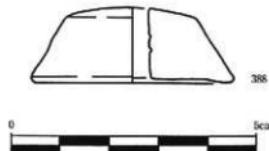


図39 陶器川地区発見の須恵質紡錘車

第Ⅲ章 まとめ

1. 須恵器生産にかかる陶器南の集落

第1章で、陶邑以前の陶器南遺跡周辺について、歴史環境を概観した。本章では発見遺構を中心に須恵器生産にかかる陶器南の集落について概観し、まとめとしたい。

古墳時代中期、泉北丘陵には窯業生産に関連した工人たちの集落が大規模に営まれた。もっとも古い須恵器窯は堺市大庭寺遺跡から発見され、400年代はじめの時期が与えられている。そのころ、百舌鳥の台地上では、履中天皇陵古墳・仁德天皇陵古墳など、巨大古墳の造営が頂点をむかえていた。大庭寺遺跡の須恵器は韓国南部の伽耶地域の土器と共通する特徴があるという。ただし、彼地から窯業生産にかかる人々が大量に移住した痕跡はない。少数の技術者はこの地に定住したとしても大半は在地にくらした人々が須恵器生産にとり込まれたり、農閑期に周辺から移動して須恵器生産に従事したと考える。泉北丘陵では弥生・古墳時代に大規模な水田開発が行われ、農業基盤から古墳造営を可能にした有力者が台頭した痕跡がない。須恵器生産が農閑期に行われたとしても陶器南周辺にくらす人々だけで大規模窯業生産が可能だったとは考えにくい。

定型化した須恵器がつくられ、窯の数も急増する頃になると、陶器南地域でも辻之・田園・小角田・陶器北（上之）で大規模な集落が営まれるようになる。もっとも古い集落は西暦470年頃の辻之遺跡から、統いて500年前半では田園遺跡から、後半は陶器南遺跡の東北（旧上之遺跡）・小角田遺跡からである。飛鳥時代に移って600年初頭頃は辻之遺跡、600年中頃は今回発見された陶器南遺跡の南西、700年初頭は陶器南遺跡の中央・辻之遺跡が再び活気づく。

奈良時代後半から平安時代にかけては窯業生産全体が終息し、各遺跡の集落は閑散となる。集落が時期ごとに移動したり、集散する理由は須恵器窯の造営場所をかえるからで、窯の移築は燃料となる薪を周辺から切りつくしてしまうからだろう。

さて、陶器南周辺で発見される集落は単に焼物を焼いていた職人の集落という性格ではなく、統括する支配者が製品を運搬し、倉庫に保管、陶器川や前田川を使って順次輸送するための基地だったと理解する。つまり、王権の支配下にある物流拠点である。生産された須恵器は石津川河口の四ツ池遺跡などを通じて全国に流通したのだろう。

今回調査した老ノ池地区試1区は陶器川の形成した谷の南岸に位置する。岸辺の落ち込みに6世紀後半の完形の壺・壺などが落とされていた。搬送の際に転落したもの、途中の破損で廃棄されたものの可能性もある。陶器川地区河川147でも6世紀後半の須恵器が大量に一括して発見された部分があり、完形土器が多く含まれていた。同じ陶器川地区の試掘調査では5世紀後半の須恵器が同様の状況で発見されており、示唆的である。

今回の調査では搬送の実態を示す流路を人工的に制御した遺構は検出出来なかった。遺物が多く残されていた部分は人工的に形成されたよどみだった可能性もある。今後の調査において留意すべき点だと考える。

さて、当時の王は半島のハイテク技術でつくられた焼物、須恵器を宫廷の食器として独占することなく、広く庶民に流布させた。古墳時代後期以降、西日本の集落や古墳を発掘調査すると普遍的に須恵器が発見される。その技術の発進源は陶邑の工人集団が担っていたのである。

そして、陶器地域の北側に陶器千塚と呼ばれる古墳群があった。100基程度あつたらしいが今はほとんど壊されてしまった。この古墳は埋葬施設に須恵器窯と共通する焼成施設をつくったり、須恵器製の棺を納めたものもあり、工人集落の墓域と考えられている。古墳が権力者のみ営まれていた時代に、小規模ながら前方後円墳を造営し、鏡を副葬していたことなどを評価すれば、工人の中に政治的に躍進した者、勢力を強めた者がいたことを推測させる。

2. 中世の陶器南の集落

須恵器生産が終焉すると人々はこの地域から一時移動したらしい。陶器南遺跡東の丘陵を中心に再び集落が展開する時期は平安時代末から鎌倉時代である。

本年までの継続調査では、南北約70mの中に8棟以上の大型建物や柵列などが並んで見つかっている。これらの建物は現在水田化している平坦面を単位に発見される。したがって、付近のひな壇造成による丘陵の開発は中世にさかのはると推測できる。近年まで見られた田園風景は鎌倉時代の風景に合致するわけだ。それは、古墳時代から奈良時代の集落が水田によって削平、整地されていることにも符合する。

このような開発は国家・天皇が土地や収穫の租税を掌握していた時代が終了し、武士や土豪による開発地が私有財産となり、有力者同志が競い合って耕地を拡大しようとした現れではないだろうか。発見された大型建物は積極的な水田開発がにわかに富みを蓄積させたことを物語る。現在、丘陵の高所は宅地化が進んでおり、調査は及んでいないが東の谷（老ノ池方面）にも土器・瓦が大量に流れ落ちていることが確かめられたので、開拓期の集落は南河内でも有数の規模だったと予想できる。

陶器南の中世集落が大規模だった理由として、米づくり以外にも木綿や絹つくりなど、別の産業を考えるべきだ、という説がある。これまで、専業性を示す様な特殊な遺物は確認出来ていない。しかし、第1章で示したとおり、近世には米作り以外の作物に関する詳細が示されており、これらがどの時期までさかのはるのか興味がもたれる。

また、建物の規模に対比して発見される土器は器種に多様性が少なく、数量も多くない。普遍的に見られるものは消耗品である瓦質羽釜・東播系すり鉢・瓦器碗・土師質皿のみである。調理具である前二者と食器である後二者を見るかぎり、そこにくらした人々の粗食が推測できる。すなわち、米に雑穀をまぜてすり鉢です。すり鉢には注ぎ口が伴うことから汁状だったようだ。それを羽釜で加熱して瓦器碗で食べる。それは果たして、米が主になった粥だったのか、雑穀が主だったものか・・・。なかでもすり鉢の出土が目立った。調理にてこずるものを余儀なく混ぜて食していたように思える。

中世の開発も長続きしなかったようだ。南北朝の動乱から室町時代をへて、この地に有力者集団が台頭することは史料にみられない。これまでに発見されている室町時代の中世建物は、建物群中のもっとも南の高所に移動し、規模も小さくなる。陶器南の集落の最終段階を示すと考える。

陶器南遺跡関係文献

- 大阪府教育委員会 「陶器南遺跡発掘調査概要」 1995
大阪府教育委員会 「陶器南遺跡発掘調査概要」 II 1996
大阪府教育委員会 「陶器南遺跡発掘調査概要」 III 1997
大阪府教育委員会 「陶器南遺跡発掘調査概要」 IV 1998
大阪府教育委員会 「陶器南遺跡発掘調査概要」 V 1999
大阪府教育委員会 「陶器南遺跡発掘調査概要」 VI 1999
大阪府教育委員会 「陶器南遺跡発掘調査概要」 VII 2000
大阪府教育委員会 「陶器南遺跡発掘調査概要」 VIII 2001
大阪府教育委員会 「陶器千塚発掘調査概要」 1992
大阪府教育委員会 「陶器千塚発掘調査概要」 II 1993
大阪府教育委員会 「陶器千塚発掘調査概要」 III 1994
大阪府教育委員会 「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報」 6 2003
堺市教育委員会 「陶器千塚29号墳発掘調査概要報告書」 1984
堺市教育委員会 「辻之遺跡現地説明会要旨」 1982
堺市教育委員会 「田園遺跡発掘調査中間報告」 1982
堺市教育委員会 「田園」 I 堺市文化財調査報告第1集 2001
堺市教育委員会 「田園」 II 堺市文化財調査報告第19集 1984
堺市教育委員会 「陶器・小角田遺跡」(KOK001) 堺市文化財調査報告第33集 1988
堺市教育委員会 「小角田遺跡」(KOK002) 堺市文化財調査報告第38集 1988
堺市教育委員会 「陶器・小角田遺跡」(KOK003~5) 堺市文化財調査概報報告第11冊 1991
堺市教育委員会 「陶器・小角田遺跡」(KOK006) 堺市文化財調査概報報告第32冊 1992
堺市教育委員会 「小角田遺跡発掘調査概要報告」(KOK008) 堺市文化財調査概報報告第52冊 1995
宮岡謙蔵 「古鏡の研究」 1920 丸善株式会社
後藤守一 「漢式鏡」 1925 雄山閣
梅原末治 「銅鐸の研究」 1927 木耳社
森 浩一 「陶器千塚見学ノート」 1950
森 浩一 「大阪府泉北郡陶器千塚」「日本考古学年報」9 1956 日本考古学協会
森村健一 「陶器千塚1号墳」「大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第15回)資料」1986 (財)大阪文化財センター

- 服部翰明 「陶邑古墳時代集落の動向」『大阪文化財論集』 1989 （財）大阪文化財センター
- 西川寿勝 「古墳時代の物流」『大阪府担当者研究会資料集』35 1997
- 山田隆一 「中世の堺市陶器窯跡とその周辺」『大阪府担当者研究会資料集』38 1999
- 海邊博史 「堺市土山窯跡の検討」『関西大学博物館紀要』5 1999 関西大学博物館
- 樋口吉文 「茅渟県陶邑の最新の考古学成果から」『堺市博物館報』18 2000 堺市立博物館
- 西川寿勝 「古墳時代の泉北のまち」『大阪春秋』96 2000 大阪春秋社
- 西川寿勝 「遺跡の年代を調べる手法」『飛鳥池遺跡と亀形石』 2001 K I メディア出版
- 西川寿勝 「正倉院御物と宮廷生活」「世界遺産平城宮跡を考える」 2002 K I メディア出版
- 西川寿勝 「飛鳥・奈良時代の層年代」「考古学と層年代」 2003 ミネルヴァ書房
- 樋口吉文 「陶器千塚古墳群の出土品」『堺市博物館報』23 2004 堺市立博物館

埋回	面版	実測	地区	遺構・土層	整理	残存	埋回	面版	実測	地区	遺構・土層	整理	残存
1	2	14	I - 北	地山直上	須恵器环形	△	72	4	35	試10区		サクナカト製火打石	◎
2	2	7	I - 中	灰白土	須恵器环形	△	73	4	20	試10区		須恵器环形	△
3	1	1	I - 中	灰白土	須恵器环形	△	74	4	30	試4区		須恵器环形	△
4	2	19	I - 西	地山直上	須恵器环形	△	75	4	21		表様	須恵器环形	△
5	2	9	I - 西	灰白土	須恵器环形	△	76	4	8		表様	須恵器环形	△
6	2	18	I - 中	灰白土	須恵器环形	△	77	4	32		表様	須恵器环形	△
7	26	1	I - 中	灰白土	須恵器环形	△	78	4	28	試11区		須恵器环形	△
8	11	1	II - 房土内		須恵器环形	△	79	4	15	試12区		須恵器环形	△
9	2	45	I - 中	灰白土	須恵器环身	△	80	4	33		表様	須恵器环身	△
10	2	42	I - 西	地山直上	須恵器环身	△	81		26	試8区		須恵器环身	△
11	64	1	I - 西	地山直上	須恵器环身	△	82	4	23	試8区		須恵器环身	△
12	63	1	I - 西	地山直上	須恵器环身	△	83	4	24	試13区	溝13-1	須恵器环身	△
13	2	23	I - 西	地山直上	須恵器环身	△	84	4	27	試13区	溝13-1	須恵器环身	△
14	2	29	I - 西	地山直上	須恵器环身	△	85		29	3区		須恵器环身	△
15	2	66	I - 中	灰白土	須恵器环身	△	86	4	22	試10区		須恵器环身	△
16	2	36	I - 中	灰白土	須恵器环身	△	87		37	試10区		須恵器环身	△
17	2	37	I - 西	地山直上	須恵器块合	△	88	4	11	試8区		須恵器环身	△
18	41	1	I - 中	灰白土	須恵器环身	△	89		14	試8区		須恵器环身	△
19	2	44	I - 北	地山直上	須恵器环身	△	90	4	25	試10区		須恵器环身	△
20	2	3	I - 中	灰白土	須恵器环身	△	91		15	試10区		須恵器环身	△
21	13	1	I - 西	灰白土	須恵器环身	△	92		31	試11区		須恵器环身	△
22	34	1	I - 西	灰白土	須恵器环身	△	93	4	13		表様	須恵器环身	△
23	2	65	I - 西	地山直上	須恵器环身	△	94		16	試12区		須恵器ハソウ	△
24	2	2	I - 西	地山直上	須恵器环身	△	95	4	17	試12区		須恵器ハソウ	△
25	4	1	I - 中	灰白土	須恵器环身	△	96	4	19	試10区		須恵器ハソウ	△
26	2	5	I - 中	灰白土	須恵器环身	△	97		10	試12区		中空器物埴輪	△
27	2	56	I - 西	灰白土	須恵器环身	△	98	4	4	4区	土坑4-1	土師器瓦爐土器	○
28	67	1	I - 北	地山直上	須恵器环身	△	99	4	6	6区	瓦質	瓦質羽笛	△
29	2	60	I - 西	灰白土	須恵器环身	△	100	4	5	5区	瓦質	瓦質羽笛	△
30	2	73	試遺物第1区	1-1	須恵器环身	△	101	4	7		表様	瓦質羽笛	△
31	2	74	試遺物第1区	1-2	須恵器环身	△	102	4	9		表様	瓦質羽笛	△
32	2	71	I - 中	灰白土	針	△	103	4	3	4区	土坑4-1	土師器瓦炉	○
33	2	72	I - 中	灰白土	針	△	104	4	34	4区	土坑4-1	土師器瓦炉	○
34	50	1	I - 中	灰白土	瓦器類	△	105	4	1	4区	土坑4-1	須恵器	○
35	49	1	I - 西	地山直上	瓦器類	△	106	4	12	4区	土坑4-1	須恵器	○
36	2	38	I - 西	灰白土	土師器皿	△							
37	36	1	I - 中	灰白土	土師器皿	△							
38	30	1	I - 西	灰白土	土師器皿	△							
39	2	15	I - 西	地山直上	土師器皿	△							
40	2	16	I - 西	地山直上	土師器皿	△							
41	2	27	I - 西	灰白土	土師器皿	△							
42	20	1	I - 西	地山直上	土師器皿	△							
43	33	1	I - 西	灰白土	土師器皿	△							
44	66	1	I - 西	地山直上	瓦器皿	△							
45	2	21	I - 中	灰白土	瓦器皿	△							
46	25	1	I - 西	地山直上	瓦器皿	△							
47	2	31	I - 中	灰白土	瓦器皿	△							
48	2	17	I - 中	中側傾曲	瓦器皿	△							
49	28	1	I - 中	灰白土	瓦器皿	△							
50	2	22	I - 中	灰白土	瓦器皿	△							
51	48	1	I - 西	灰白土	瓦器皿	△							
52	2	24	I - 西	灰白土	東播青字り鉢	△							
53	2	46	I - 中	灰白土	東播青字り鉢	△							
54	2	47	I - 西	灰白土	東播青字り鉢	△							
55	36	1	I - 西	地山直上	土師質羽笛	△							
56	52	1	I - 西	地山直上	土師質羽笛	△							
57	2	51	I - 西	北側溝	土師質羽笛	△							
58	2	53	I - 西	灰白土	中國製青白磁合子	△							
59	2	10	I - 中	灰白土	中國製白磁碟	△							
60	2	12	I - 中	灰白土	中國製白磁碟	△							
61	2	8	I - 西	地山直上	中國製白磁碟	△							
62	2	69	I - 中	灰白土	中國製青磁碟	△							
63	55	1	I - 西	灰白土	中國製白磁碟	△							
64	2	6	I - 中	灰白土	中國製白磁碟	△							
65	2	61	I - 西	地山直上	丸瓦	△							
66	2	62	I - 西	地山直上	丸瓦	△							
67	2	70	I - 中	灰白土	丸瓦	△							
68	58	1	I - 西	灰白土	丸瓦	△							
69	57	1	I - 西	灰白土	丸瓦	△							
70	59	1	I - 西	地山直上	平瓦	△							
71	2	54	I - 西	灰白土	鹿児尻陶天目鏡	△							

老ノ池地区出土遺物对照表

陶器川地区出土遺物对照表(1)

埋回	回版	天保	地区	遺集・土層	整理	残存	埋回	回版	天保	地区	遺集・土層	整理	残存
152	7	132	3	河川147	須恵器坏身	△	228	8	213	3	河川147	須恵器坏身	△
153		8	3	河川147	須恵器坏身	△	229	7	133	3	河川147	須恵器坏身	○
154	7	139	3	河川147	須恵器坏身	△	230	7	134	3	河川147	須恵器坏身	△
155		63	3	河川147	須恵器坏身	△	231		64	3	河川147	須恵器坏身	△
156		61	3	河川147	須恵器坏身	△	232	7	147	3	河川147	須恵器坏身	△
157		11	3	河川147	須恵器坏身	△	233		105	3	河川147	須恵器坏身	○
158	7	145	3	河川147	須恵器坏身	○	234		110	3	河川147	須恵器坏身	△
159		9	3	河川147	須恵器坏身	△	235	8	212	3	河川147	須恵器坏身	△
160		103	3	河川147	須恵器坏身	△	236		6	3	河川147	須恵器坏身	●
161		10	3	河川147	須恵器坏身	△	237	7	136	3	河川147	須恵器坏身	△
162		65	3	河川147	須恵器坏身	△	238	7	148	3	河川147	須恵器坏身	△
163		106	3	河川147	須恵器坏身	△	239	7	149	3	河川147	須恵器坏身	△
164		59	3	河川147	須恵器坏身	△	240	7	198	3	河川147	須恵器坏身	○
165		62	3	河川147	須恵器坏身	△	241	7	143	3	河川147	須恵器坏身	△
166		108	3	河川147	須恵器坏身	△	242	7	135	3	河川147	須恵器坏身	△
167		112	3	河川147	須恵器坏身	△	243	7	137	3	河川147	須恵器坏身	○
168		70	3	河川147	須恵器坏身	△	244	7	142	3	河川147	須恵器坏身	△
169		71	3	河川147	須恵器坏身	△	245		102	3	河川147	須恵器坏身	△
170		213	3	河川147	須恵器坏身	△	246		20	3	河川147	須恵器坏身	△
171	9	90	3	河川147	須恵器坏身	○	247		39	3	河川147	須恵器坏身	△
172		74	3	河川147	須恵器坏身	△	248	10	168	3	河川147	須恵器坏身	△
173	14	3	河川147	須恵器坏身	△	249	9	80	3	河川147	須恵器坏身	○	
174	40	3	河川147	須恵器坏身	△	250	9	86	3	河川147	須恵器坏身	○	
175	95	3	河川147	須恵器坏身	△	251	9	121	3	河川147	須恵器坏身	○	
176	17	3	河川147	須恵器坏身	△	252		23	3	河川147	須恵器坏身	△	
177	3	3	河川147	須恵器坏身	△	253	9	82	3	河川147	須恵器坏身	○	
178	9	83	3	河川147	須恵器坏身	○	254		33	3	河川147	須恵器坏身	△
179		100	3	河川147	須恵器坏身	△	255		72	3	河川147	須恵器坏身	△
180	9	89	3	河川147	須恵器坏身	○	256		1	3	河川147	須恵器坏身	△
181	10	171	3	河川147	須恵器坏身	△	257		76	3	河川147	須恵器坏身	△
182		98	3	河川147	須恵器坏身	△	258	9	120	3	河川147	須恵器坏身	△
183		28	3	河川147	須恵器坏身	△	259	9	81	3	河川147	須恵器坏身	○
184	9	85	3	河川147	須恵器坏身	△	260		5	3	河川147	須恵器坏身	●
185		31	3	河川147	須恵器坏身	△	261		77	3	河川147	須恵器坏身	△
186	10	91	3	河川147	須恵器坏身	○	262		2	3	河川147	須恵器坏身	△
187	10	92	3	河川147	須恵器坏身	○	263	9	113	3	河川147	須恵器坏身	○
188	15	3	河川147	須恵器坏身	△	264	7	149	3	河川147	須恵器坏身	△	
189	9	124	3	河川147	須恵器坏身	○	265		12	3	河川147	須恵器坏身	△
190	9	118	3	河川147	須恵器坏身	○	266		111	3	河川147	須恵器坏身	△
191		37	3	河川147	須恵器坏身	△	267	8	206	3	河川147	須恵器坏身	△
192	41	3	河川147	須恵器坏身	△	268	8	202	3	河川147	須恵器坏身	△	
193		36	3	河川147	須恵器坏身	△	269	8	205	3	河川147	須恵器坏身	○
194	9	118	3	河川147	須恵器坏身	○	270	8	203	3	河川147	須恵器坏身	△
195	7	131	3	河川147	須恵器坏身	○	271	8	204	3	河川147	須恵器坏身	○
196		67	3	河川147	須恵器坏身	△	272	9	86	3	河川147	須恵器坏身	○
197	7	144	3	河川147	須恵器坏身	○	273	10	94	3	河川147	須恵器坏身	△
198		7	3	河川147	須恵器坏身	△	274	9	114	3	河川147	須恵器坏身	○
199		66	3	河川147	須恵器坏身	△	275	9	79	3	河川147	須恵器坏身	○
200	7	140	3	河川147	須恵器坏身	△	276	9	84	3	河川147	須恵器坏身	○
201	7	141	3	河川147	須恵器坏身	○	277	10	163	3	河川147	須恵器坏身	△
202	8	209	3	河川147	須恵器坏身	△	278	10	170	3	河川147	須恵器坏身	△
203		60	3	河川147	須恵器坏身	△	279	10	162	3	河川147	須恵器坏身	△
204	8	214	3	河川147	須恵器坏身	△	280	10	164	3	河川147	須恵器坏身	○
205		68	3	河川147	須恵器坏身	△	281	10	165	3	河川147	須恵器坏身	△
206		104	3	河川147	須恵器坏身	△	282	10	181	3	河川147	須恵器坏身	○
207		98	3	河川147	須恵器坏身	○	283	10	165	3	河川147	須恵器坏身	△
208	9	117	3	河川147	須恵器坏身	△	284		96	3	河川147	須恵器坏身	△
209		97	3	河川147	須恵器坏身	△	285	10	115	3	河川147	須恵器坏身	○
210	10	3	河川147	須恵器坏身	△	286	10	123	3	河川147	須恵器坏身	△	
211		13	3	河川147	須恵器坏身	△	287	7	150	3	河川147	須恵器坏身	△
212		75	3	河川147	須恵器坏身	△	288	7	151	3	河川147	須恵器坏身	△
213	10	167	3	河川147	須恵器坏身	○	289	8	200	3	河川147	須恵器坏身	△
214		34	3	河川147	須恵器坏身	△	290	8	201	3	河川147	須恵器坏身	○
215		4	3	河川147	須恵器坏身	△	291	11	53	3	河川147	須恵器坏身	△
216		35	3	河川147	須恵器坏身	○	292	11	54	3	河川147	須恵器坏身	△
217		30	3	河川147	須恵器坏身	△	293		248	3	河川147	須恵器坏身	△
218		32	3	河川147	須恵器坏身	●	294	11	196	3	河川147	須恵器坏身	△
219		38	3	河川147	須恵器坏身	△	295	11	57	3	河川147	須恵器坏身	△
220		29	3	河川147	須恵器坏身	△	296	11	58	3	河川147	須恵器坏身	●
221	9	122	3	河川147	須恵器坏身	○	297	11	51	3	河川147	須恵器坏身	△
222	9	87	3	河川147	須恵器坏身	○	298	11	178	3	河川147	須恵器坏身	△
223		19	3	河川147	須恵器坏身	△	299		331	3	河川147	須恵器坏身	●
224		22	3	河川147	須恵器坏身	●	300		78	3	河川147	須恵器坏身	●
225		93	3	河川147	須恵器坏身	△	301	11	128	3	河川147	須恵器坏身	●
226		16	3	河川147	須恵器坏身	△	302	12	44	3	河川147	須恵器坏身	○
227	B	119	3	河川147	須恵器坏身	○				3	河川147	須恵器坏身	△

陶器川地区出土遺物对照表(2)

博団	回版	変調	地区	遺種・土層	埋積	残存	博団	回版	変調	地区	遺種・土層	埋積	残存	
303	11	176	3	河川147	須恵器縫	△	379	330	3	河川147	土師器縫	△		
304		250	3	河川147	須恵器縫坏	△	380	252	3	河川147	土師器縫	△		
305	11	129	3	河川147	須恵器縫	△	381	306	2	流路2	土師器縫	●		
306	11	55	3	河川147	須恵器縫	○	382	13	155	3	河川147	土師器縫	●	
307	11	174	3	河川147	須恵器縫	△	383	13	46	3	河川147	土師器縫	●	
308	11	177	3	河川147	須恵器縫	△	384	13	47	3	河川147	土師器縫	●	
309	11	173	3	河川147	須恵器縫	△	385	251	3	河川147	土師器縫	△		
310	11	172	3	河川147	須恵器縫	△	386	13	49	3	河川147	土師器縫	●	
311	12	45	3	河川147	須恵器縫	●	387	13	48	3	流路18	土師器縫	●	
312	11	154	3	河川147	須恵器縫	△	388	290	3	第1層	中型須白磁縫	△		
313	12	184	3	河川147	須恵器縫台	△	389	309	2	流路2	中型須青磁縫	△		
314	12	181	3	河川147	須恵器縫台	△	390	293	3	第1層	中型須青磁縫	△		
315	12	182	3	河川147	須恵器縫台	△	391	13	223	1	機械透削	中型須青磁縫	△	
316	12	183	3	河川147	須恵器縫台	△	392	292	3	第1層	中型須青磁縫	△		
317	12	159	3	河川147	須恵器縫台	△	393	258	4	流166	中型須白磁縫	△		
318	12	186	3	河川147	須恵器縫台	△	394	288	3	第1層	中型須白磁縫	△		
319		158	3	河川147	須恵器縫台	△	395	241	2	包金層	瓦器縫	△		
320	12	160	3	河川147	須恵器縫台	△	396	263	4	流166-8	瓦器縫	△		
321	12	43	3	河川147	須恵器縫台	△	397	234	2	第1層	瓦器縫	△		
322	12	187	3	河川147	須恵器縫台	△	398	228	2	河川179	瓦器縫	△		
323	12	185	3	河川147	須恵器縫台	△	399	300	3	機械透削	瓦器縫	△		
324	12	179	3	河川147	須恵器縫	△	400	297	3	機械透削	瓦器縫	△		
325	11	127	3	河川147	須恵器縫	△	401	266	4	溝198	瓦器縫	△		
326		247	3	河川147	須恵器縫	△	402	267	4	溝167	瓦器縫	△		
327		246	3	河川147	須恵器縫	△	403	262	4	溝166	瓦器縫	△		
328		245	3	河川147	須恵器縫	△	404	260	4	溝166	瓦器縫	△		
329	13	220	3	河川147	須恵器縫	△	405	239	2	南側透削	瓦器縫	△		
330	13	218	3	河川147	須恵器縫	△	406	276	3	河川134	土師器縫	△		
331	13	221	3	河川147	須恵器縫	△	407	237	2	唐土内	土師器縫	△		
332	12	180	3	河川147	須恵器縫	△	408	332	3	機械透削	土師器縫	△		
333	13	50	3	河川147	須恵器縫	●	409	13	191	3	河川147	瓦器縫	△	
334		216	3	河川147	須恵器縫	●	410	331	3	唐土内	瓦器縫	△		
335	13	130	3	河川147	須恵器縫	△	411	298	3	第1層	土師器縫	△		
336	11	175	3	河川147	須恵器縫	△	412	13	193	3	河川147	土師器縫	△	
337	11	56	3	河川147	須恵器縫	△	413	264	4	溝166	土師器縫	△		
338	11	153	3	河川147	須恵器縫	△	414	271	3	溝69	土師器縫	△		
339		27	3	河川147	須恵器縫	△	415	232	2	第1層	明治銅引鉢	△		
340	12	42	3	河川147	須恵器縫	●	416	233	2	機械透削	丹波燒	△		
341	12	25	3	河川147	須恵器縫	●	417	291	3	土坑46	肥料器骨磁染付	△		
342		26	3	河川147	須恵器縫	●	418	275	3	土坑46	須恵器前輪車	◎		
343	12	24	3	河川147	須恵器縫	●	419	13	224	2	流路1	貴人火葬	◎	
344	12	18	3	河川147	須恵器縫	●	420	13	225	2	櫛形後輪車	水素寶寶	◎	
345		258	4	P-179	須恵器縫坏	△	7-e	128	3	河川147	須恵器縫坏	△		
346		284	3	溝109	須恵器縫坏	△	8-b	215	3	河川147	須恵器縫坏	△		
347		285	3	第1層	須恵器縫坏	△	9-c	126	3	河川147	須恵器縫坏	◎		
348		230	2	陶土内	須恵器縫坏	△	9-d	125	3	河川147	須恵器縫坏	◎		
349		268	4	溝168	須恵器縫坏	△	10-e	169	3	河川147	須恵器縫坏	△		
350		265	4	溝168	須恵器縫坏	△	10-f	152	3	河川147	須恵器縫坏	△		
351		306	2	流路2	須恵器縫坏	△	11-g	52	3	河川147	須恵器縫坏	△		
352		321	1	第1層	須恵器縫坏	△	12-h	3	河川147	須恵器縫台	△			
353		287	3	第1層横柵	須恵器縫坏	○	12-i	3	河川147	須恵器縫台	△			
354		307	2	流路2	須恵器縫坏	△	12-j	3	河川147	須恵器縫台	△			
355		303	3	第1層	須恵器縫台	△	13-k	194	3	河川147	瓦質鉢	△		
356		322	1	南側溝	須恵器縫	△	13-l	190	3	河川147	瓦質鉢	△		
357		276	3	井戸156	須恵器縫	●	13-m	189	3	河川147	瓦質	△		
358		323	1	井戸1	須恵器縫	△	13-n	196	3	河川147	瓦質	△		
359		231	2	陶土内	須恵器縫	●	13-o	188	3	河川147	瓦質	△		
360		317	1	陶土	須恵器縫台	△	13-p	195	3	河川147	須恵器縫	△		
361		318	1	第1層	須恵器縫台	△	13-q	192	3	河川147	須恵器縫	△		
362		327	2	流路3	須恵器縫台	△	13-r	2	流路1	須恵器縫体付坏	△			
363		324	1	第2層	須恵器縫台	△	13-s	2	流路3	須恵器縫体付坏	△			
364		272	3	溝108	須恵器縫台	△	13-t	157	2	流路3	瓦	△		
365		226	2	河川179	須恵器にね跡	●								
366	13	156	2	流路3	陶質柵	△								
367		277	3	河川34	須恵器縫坏	△								
368		227	2	河川179	須恵器縫坏	△								
369		236	2	南側溝	須恵器縫坏	△								
370		299	3	機械透削	須恵器縫坏	△								
371		281	4	溝166	須恵器縫坏	△								
372		235	2	北側溝	須恵器縫坏	△								
373		313	2	流路3	須恵器縫坏	△								
374		312	2	流路3	須恵器縫	△								
375		296	3	第1層	須恵器縫	△								
376		316	1	第2層	須恵器縫	△								
377		295	3	側倒	須恵器縫	△								
378		238	2	北側溝	須恵器縫	△								

陶器川地区出土遺物対照表(3)

報告書抄録

ふりがな	とうきみなみいせきはつくつちょうさがいよう・IX							
書名	陶器南遺跡発掘調査概要・IX							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集著者名	西川寿勝・杉木清美・渡辺晴香							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきみなみいせき 陶器南遺跡	おおさかみときらいしどうききた 大阪府堺市陶器北 つじの ・辻之	27201	336	34° 30' 41.69"	135° 31' 10.80"	02年6月～ 10月	2240m ²	府営集落 基盤整備 事業 「陶器北 地区」に 伴う調査
すえむらかまあとぐん 陶邑窯跡群	おおさかみときらいしどうききた 大阪府堺市陶器北	246		34° 30' 33.78"	135° 31' 50.80"	02年10月～ 03年3月	445m ²	
とうきいせき 陶器遺跡	おおさかみときらいしどうききた 大阪府堺市陶器北	183		34° 30'	135° 31'	02年8月～ 9月	112m ²	
とうきせんづか 陶器千塚		130		51.13"	25.53"		合計 2797m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
とうきみなみいせき 陶器南遺跡	集落	古墳時代後期 平安時代末～ 江戸時代	河川・溝・土坑 溝・土坑	須恵器・土師器・ 瓦器・土師器・瓦・ 青磁・白磁・陶磁器	陶邑で生産された 須恵器の物流拠点			
すえむらかまあとぐん 陶邑窯跡群	生産遺跡	古墳時代後期 鎌倉時代	自然河川	須恵器・土師器・ 瓦器・瓦・青磁・白磁	付近に中世集落？			
とうきいせき 陶器遺跡	集落	古墳時代後期 江戸時代	溝・土坑	須恵器・土師器・ 陶磁器	陶邑関連集落			
とうきせんづか 陶器千塚	古墳	古墳時代後期		須恵器・土師器	陶器藩陣屋跡関連 星敷地？			

図 版



陶器川地区河川147一括出土土器



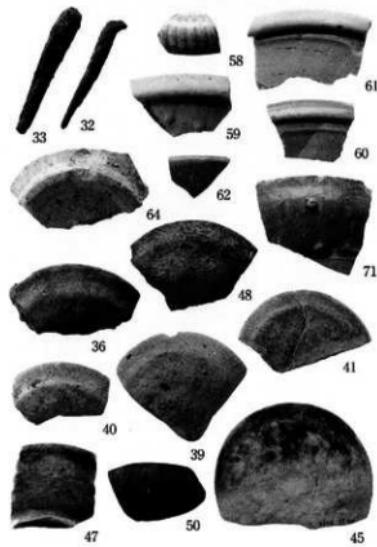
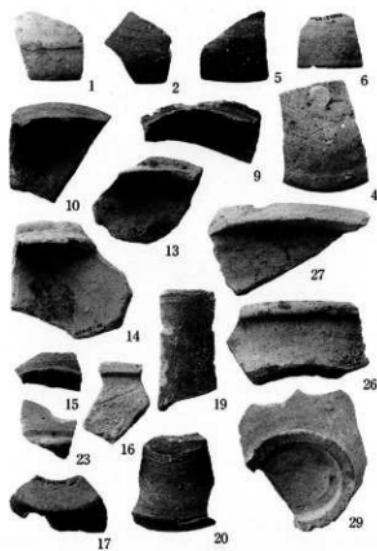
a, b
1区

c, d
2区

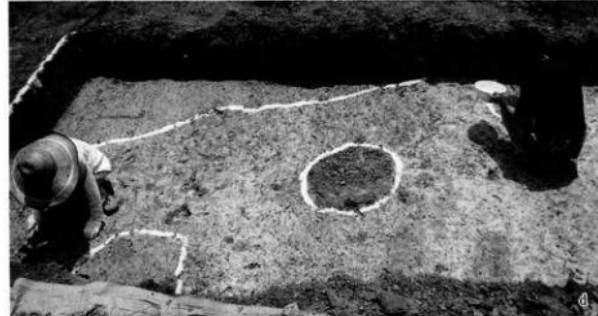
e~f
3~5
区



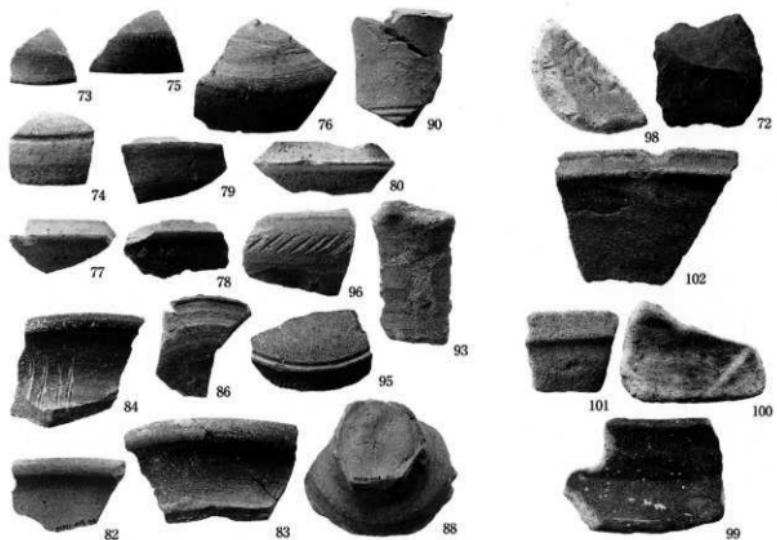
(図版1) 老ノ池地区の調査区



(図版2) 老ノ池地区発見遺物



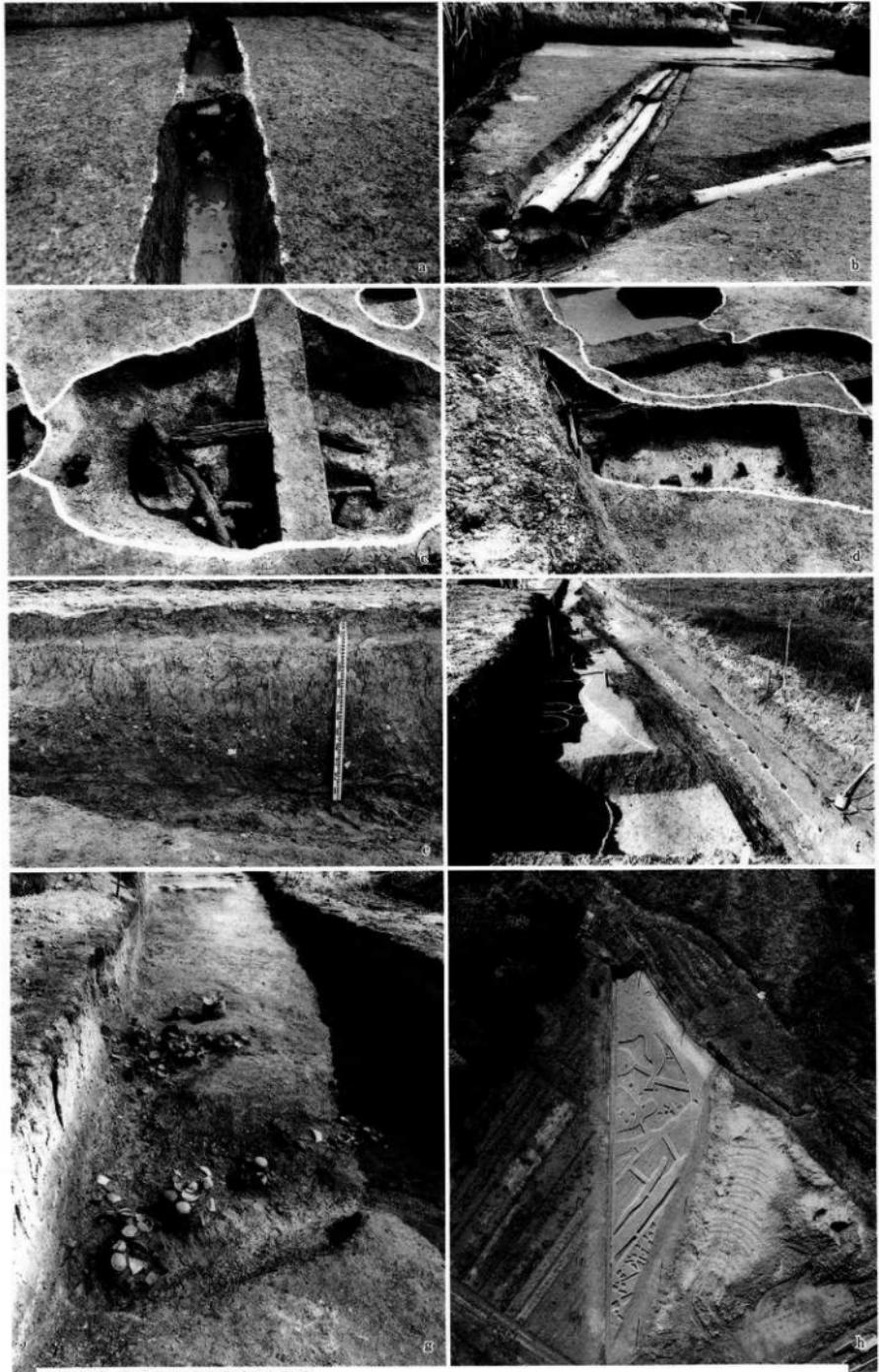
(図版3) 住区地区の試掘調査区 (a～c 3区, d, e 4区, f 12区, g 7区)



(図版4) 住区地区発見遺物



(図版5) 陶器川地区の調査区（1）(a 1区西から, b・c 2区南から, d・e 3区南から)



(図版6) 陶器川地区の調査区(2)

a溝21. b溝31. c井戸61. d溝68. e河川147壁断面. f3区東端調査区. g河川147出土遺物. h4区(南から)



158



a



200



239



237



242



195



230



241



243



287



201



152



232



288



264



244



149



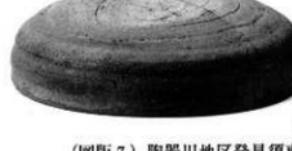
197



238



147



229

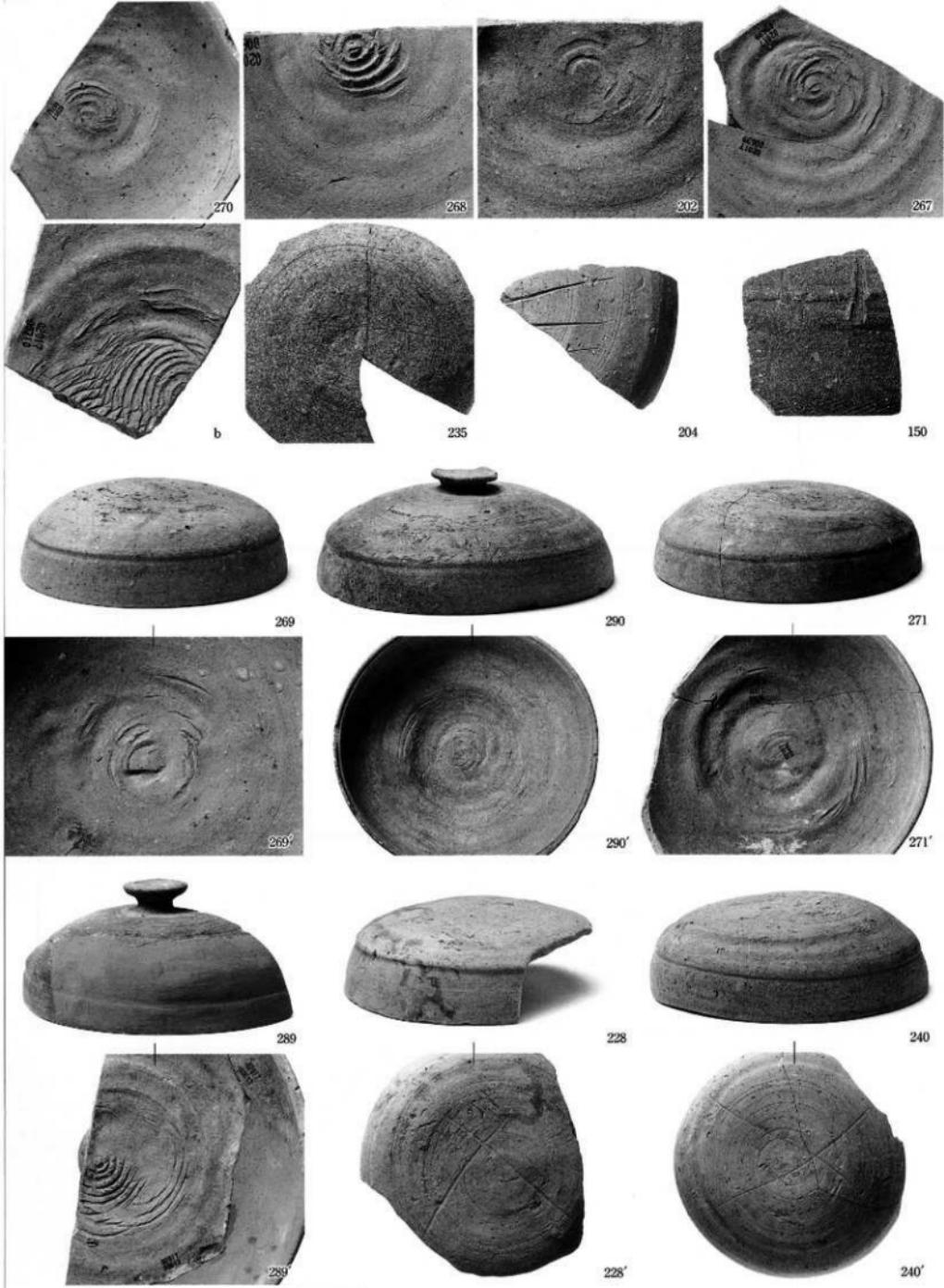


154



148

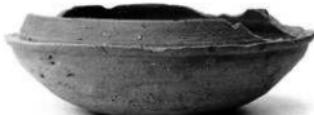
(図版7) 陶器川地区発見須恵器 (1)



(図版8) 陶器川地区発見須恵器(2)



239



238



250



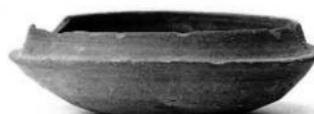
194



251



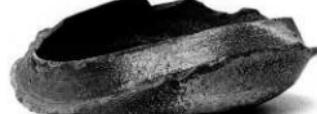
208



253



178



c



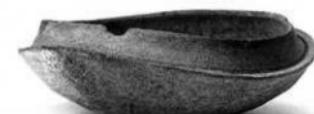
263



221



222



d



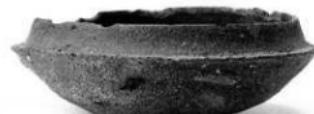
274



272



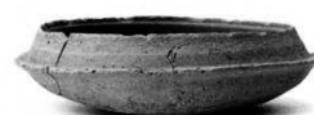
227



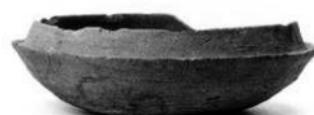
276



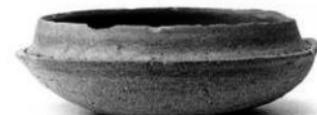
189



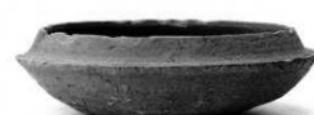
275



190



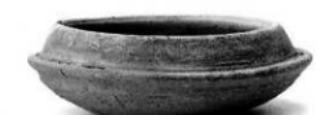
180



249



184



171

(図版9) 陶器川地区発見須恵器(3)



(図版10) 陶器川地区発見須恵器 (4)



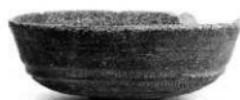
296



295



300



297



298



g



292



303



308



291



294



306



305



307



337



338



336



312



325



310



309

(図版11) 陶器川地区発見須恵器 (5)



324



301



311



314



322



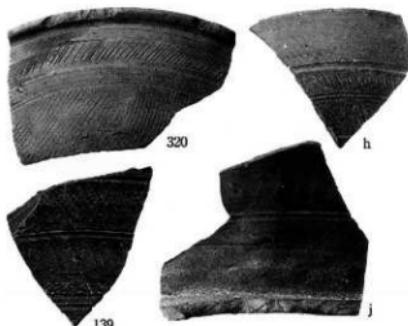
313



332



317



320



342



344



343



340

(図版12) 陶器川地区発見須恵器 (6)



333



386



387



382



383



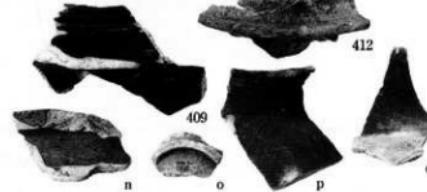
384



k

l

m



409

412

o

p

q



335



329

330

331



r



s



134

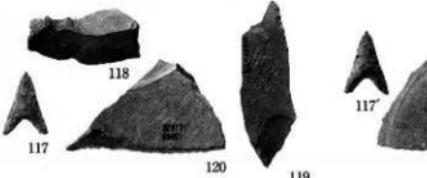
391



366



t



117

118

120

117'

118'

119

120'



119'



419

420

(図版13) 陶器川地区発見遺物

陶器南遺跡発掘調査概要・IX

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL. 06-6941-0351
発行日 2004年3月31日
印刷 株式会社中島弘文堂印刷所
〒537-0002
大阪市城東区深江南2-6-8

